

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	日本語の係り結びの消失から見た修正カートグラフィーの意義
Author(s)	宗正 佳啓
Citation	福岡工業大学研究論集 第52巻第2号 P85-P123
Issue Date	2020-2
URI	http://hdl.handle.net/11478/1426
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

日本語の係り結びの消失から見た修正カートグラフィーの意義

宗 正 佳 啓 (社会環境学科)

The Significance of a Modified Cartography through Investigation of the Demise of Kakari-musubi in Japanese

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

The functional categories in the left peripheral area of the cartography have their own discourse function. Force in the left peripheral field activates as a force marker. However, this paper shows that Fin in the left peripheral field can operate as a force marker and a verb moves up to there due to inheritance of [+attract] feature from Force to Fin. The framework presented here provides a straightforward account of V1, V2 phenomena in Germanic languages. English shows cyclic demise of V-to-C and V-to-T movement in its history. A set of puzzles concerning the patterns of the phenomena is explained as a consequence of the analysis which admits gradual demise of verb attraction to Fin. Furthermore, this paper addresses the possibility of occurrence of MoodP between ForceP and FinP in the right periphery of clauses as well as in the left periphery of them. MoodP bears the function of speaker's mood of utterance and interacts with Force in attracting verbs to Fin. The demise of Kakari-musubi in Japanese is closely related to the loss of verb movement to Fin.

Key words: *left periphery, Force, Fin, verb movement, mood, demise of Kakari-musubi*

1. 序

談話と統語論は以前は個別のものとして扱われてきた。しかし、Rizzi (1997, 2004) 以来談話の情報を統語に組み込む取り組みが、カートグラフィー (cartography) の名の元に行われている。このカートグラフィーの趣旨は普遍的な統語構造を地図のような形で綿密に表示し、トピックやフォーカスといった談話情報構造が統語構造と繋がるというものである。

本稿では、動詞移動に焦点を当て、カートグラフィーに基づき、動詞移動は発話のフォーカスに関連しており、具体的には Force の活性化に伴う素性の Fin への継承により Fin に動詞が牽引されることを確認する。また、こうした分析を基に英語及び他のゲルマン語族の言語の主要部移動、正確には V-to-T, T-to-C 移動の共時的言語差異、及びその通時的差異を考察し、英語における動詞の V2, V-to-T 移動の消失を見ていく。さらに、Force と Fin の間に MoodP という範疇が存在することを帰納的に導き出す。そして動詞の移動は前述の Force に指定された素性が Mood そして Fin に継承することを見ていき、英語の動詞

の移動が上代日本語から観察される係り結びの消失と有機的に関連していることを示し、本稿で提案する MoodP を組み込んだ修正カートグラフィーの妥当性を実証する。

本稿では、動詞の移動は前述の Force に指定された素性が Mood そして Fin に継承されることを見ていき、日本語においてもこの素性継承により動詞が Fin に移動していたことを提案する。また、日本語の古語では Fin への動詞移動があったがそれが消失し、その消失が原因で上代日本語から観察される係り結びが消失したことを提示し、英語の動詞移動の循環的消失が係り結びの消失と有機的に関連していることを示すことで MoodP を組み込んだ改定カートグラフィーの妥当性を実証していく。

2. 動詞移動の本質

英語はゲルマン語、正確には西ゲルマン語に所属する言語である。ゲルマン諸語においては動詞第2位 (V2) という現象が観察されるが、英語だけはこの V2 現象は wh 疑問文や否定辞倒置といったごく限られた現象に限定され、いわゆる残余の V2 (residual V2) と呼ばれるものに動詞移動が限定される。例えば、(1) のような疑問文において見られる動詞移動である。

(1) a. What did John buy yesterday?

b. Is he singing?

(1a)ではwh演算子whatがQの指定部に移動され、Qの補部がwh演算子のスコープとなり、以下の論理形式が形成される。

(2) For which x, x a thing, [John bought x yesterday]

(1b)のyes-no疑問文においては、wh疑問文と対照的にQの指定部に顕在的な要素が生起することはないが、その代わりに主語・助動詞倒置が生じてyes-no疑問文であることが標示され、命題の真偽値を問う形になっている。宗正(2018)では、カートグラフィーの枠組みで(1)のような疑問文は以下のような構造を持つことを主張した。

(3) Wh疑問文

[ForceP [What Q [FinP did-Fin [TP John [vP buy yesterday]]]]]

(4) Yes-no疑問文

[ForceP [OP Q [FinP Is-Fin [TP he [vP singing]]]]]

Wh疑問文ではQが活性化してwh句を牽引し、その指定部にwh句を移動させる。Wh疑問文であるから疑問のForceが活性化し、英語ではこの活性化が強いので[+attract]の素性がForceに指定され、それが素性継承によりFinに循環的に継承される。この継承された[+attract]の素性により助動詞がTからFinに牽引される。Yes-no疑問文においては、Qの指定部にwh演算子の代わりに空演算子が入る。Yes-no疑問文の場合、命題の真偽値を問うため、wh疑問文と同じく疑問のForceが活性化し、それが強いので[+attract]の素性がForceに指定され、それが素性継承によりFinに循環的に継承される。この継承された[+attract]の素性により助動詞がTからFinに牽引される。

Wh疑問文の場合、Forceの活性化が弱く[+attract]の素性がForceに指定されない場合がある。この場合、[+attract]の素性がForceから素性継承によりFinに循環的に継承されることはないで、Finへの動詞の牽引はなく倒置現象が生じない。この典型的な例がインドネシア語のwh疑問文である。インドネシア語(英語と同じくSVO言語)ではwh疑問文は、wh句は文頭に移動する(これによって文タイプが表示される)が、英語の主語・助動詞倒置に相当するもの、すなわちT-to-C移動が以下に示すように存在しない。

(5) インドネシア語

[CP Mengapa [TP dia pergi ke situ]]

why she go to there

“Why does she go there?”

こうした言語差異は疑問のForceの活性化の際のその強さの差によって生み出される。つまり、英語を含むゲルマン系の言語ではForceに活性化の際に[+attract]の素性が指定され、一方でインドネシア語のような言語ではそれが指定されないということである。

このように(助)動詞の移動に関する言語差異が生じる

のはForceに[+attract]の素性が指定されるか否かに依拠している。その素性が指定されれば、Finに継承され、その素性に基づいて(助)動詞をFinに牽引する。(助)動詞がFinに移動しないのであれば、例えば日本語のようにフォースを表す小辞の併合が行われる。

前述のように、ゲルマン系の言語ではV2現象が生じる。ドイツ語を具体例として挙げると以下ようになる(例文はHaider(2010)による)。

(6) ドイツ語

a. [Ein Maus_i [hat [heute e_i den Käse verschmäht]]]

a mouse has today the cheese disdained

b. [Den Käse_i [hat [heute eine Maus e_i verschmäht]]]

c. [Heute_i [hat [e_i eine Maus den Käse verschmäht]]]

d. [Verschmäht_i [hat [heute eine Maus den Käse e_i]]]

e. [Den Käse verschmäht_i [hat [heute eine Maus e_i]]]

(6a)は主語が前置され、(6b)は目的語、(6c)は副詞類、(6d)は動詞、(6e)は動詞句が前置されている。これら前置された要素は、話題化、焦点化を受けている。こうした例はすべて平叙文での現象であるが、それぞれ話題化された要素や焦点化された要素は以下に示す構造に従って話題化された場合はTopの指定部に、焦点化された場合はFocの指定部に牽引される。

(7) [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [Q [FinP [TP [vP...

(6)のすべての例において、発話フォースが活性化し、その活性化が強いので[+attract]の素性がForceに指定され、それが素性継承によりFinに循環的に継承される。この継承された[+attract]の素性により(助)動詞がTからFinに牽引されV2現象が生じる。話題化、焦点化、疑問文はそれぞれのフォースが活性化し、それに関連する要素が左周辺部に移動した場合、活性化の強さによってForceに[+attract]という素性が指定されれば、素性継承によりそれがFinに継承される。その後Finに継承された[+attract]が(助)動詞を牽引する。これがゲルマン系の言語に観察されるV2現象のメカニズムである。

ゲルマン系の言語ではV2現象はwh疑問文、話題化、焦点化において観察されるが、英語においてはゲルマン系の言語であるにも関わらずV2現象はwh疑問文、否定辞倒置に限定され、話題化、焦点化では観察されない。

(8) a. What did he buy yesterday?

b. Never before has he read such a good article.

しかし、現在のゲルマン系の言語のように英語も古英語期にはV2があった。Andrew(1940)の分類によると主節ではSVOが基本、従属節ではSOVが基本であるという。その主節でのV2の具体例は以下の通りである。

(9) wh疑問文

Hwi wolde God swa lytles þinges him forwyrnan?

why would God so small thing him deny

“Why should God deny him such a small thing?”

(*Ælfric's Catholic Homilie* I, 1.14.2, Fischer et al.

(2000: 106))

(10) 否定辞倒置

Ne sceal he naht unakiefedes don
not shall he nothing unlawful do
“He shall not do anything unlawful”
(*King Alfred's West Saxon Version of Gregory's
Pastoral Care*, 10.61.14, Fischer et al. (2000: 106))

(11) 指示副詞 þa

Þa wæs þæt folc þæs micclan welan ungemetlice
then was the people the great prosperity excessively
brucende...
partaking
(*The Old English Orosius*, 1.23.3, Fischer et al. (2000:
106))

(12) yes-no 疑問文

Hæfst þu ænigne geferan?
“Have you any companions?”
(*Ælfric's Colloquy*, 28, Fischer et al. (2000: 106))

古英語期において、(9)のように wh 疑問文では現在のゲルマン系の言語と同じく V2 を起こす。(10)のように否定辞が前置された場合、それに動詞が後続し V2 が起こる。文頭に指示副詞 þa が導入された場合、(11)のように V2 が起こる。この指示副詞には他に, þonne, þær がある。Yes-no 疑問文の場合、(12)のように文頭に動詞が生じる。(9)の wh 疑問文の場合、wh 句が Q の指定部に入り、疑問のフォース標示のため Force が活性化し、それが強いと [+attract] の素性が Force に指定され、それが Fin に継承されて、Fin に動詞が牽引される。(10)の場合、否定辞は強調されているので Foc の指定部に否定辞が入り、動詞が Fin に移動し焦点化に関するフォース標示と (助) 動詞移動が具現化されていることになる。(11)においては、指示副詞 þa も強調されているため、同じく Foc の指定部に入り、焦点化のフォースが活性化され、その強さゆえに Force から [+attract] の素性が Fin に継承されて、Fin に動詞が牽引されている。(12)の場合、Yes-no 疑問文としてのフォースが活性化され、その強さゆえに [+attract] の素性が Force から Fin に継承されて、動詞が Fin に牽引されている。

さらに古英語では話題化においても、以下に示すように V2 が生じていた。

(13) On twan þingum hæfde God þæs mannes sawle gegodod
in two things had God the man's soul endowed
“With two things God had endowed man's soul.”
(*Ælfric's Catholic Homilie I*, 1.20.1, Fischer
et al. (2000: 114))

上記の例では、話題化された要素は Top の指定部に入り、話題化のフォース標示の活性化が強いため、Force から [+attract] の素性が Fin に継承されて、Fin に動詞が牽引されている。

前述のように古英語期では SVO, SOV の語順が可能で

あったが、次第に SOV は廃れ SVO の語順が支配的になる。Kemenade (1987) によるとそれはおよそ1200年頃であるという。こうした初期中英語では wh 疑問文、否定辞倒置、指示副詞の前置では V2 が観察される。具体例は以下の通りである (例文はすべて Kemenade (1997) からのものである)。

- (14) a. Hweonone cumest tu ...
whence come you
“When do you come from...”
b. Ne mei ich he seið. Nohwer spoken
not may I he says nowhere speak
“I may not, he says, speak anywhere.”
c. Ðanne wunest ðu sikerliche on Gode
then abide you truly in God
“Then you abide truly in God.”

しかし、Kemenade (1987) によると、V2 は一部の現象に見られなくなり、それは15世紀の後半であるという (Kemenade (1997), Roberts (1993), Kroch and Taylor (1997), Warner (1997) 等参照)。

- (15) a. But in þis world þe beste lif for prestis is holy life
but in this world the best life for priests is holy life
b. Certis þei ben opyn foolis
certainly they are open fools

(15) は話題化又は焦点化の例であるが、V2 がなく現代英語の特徴を示している。話題化についても話題化に関するフォース標示の活性化が生じ、Fin に動詞が牽引される。疑問文であれば疑問のフォース (interrogative force) が生じると言えるが、話題化又は焦点化の場合は平叙文でのフォースである。ということは、英語では話題化と焦点化のフォース標示の具現化が15世紀の後半に消失したとすることができる。

英語の平叙文において話題化と焦点化の V2 が15世紀の後半に消失したのであるが、この V2 の消失は一気に行われたものではなく循環的に行われている。V2 は V-to-T-to-C 移動であるが、言語の中には平叙文において V-to-T 移動を行うものがある。フランス語がそれに相当する。

- (16) フランス語
a. Jean embrasse souvent Marie.
John kisses often Mary
b. Jean (ne) mange pas de chocolat.
John eats not chocolate
c. Les enfants mangent tous le chocolat.
the children eat all chocolate

(16a) は副詞 souvent の左に動詞があり、(16b) は pas の左に動詞があり、(16c) は遊離数量詞 tous の左に動詞がある。その副詞、否定詞 pas、遊離数量詞は VP に付加しているため、それらの左にある動詞は V-to-T 移動を行っていると考えられる。

こうした V-to-T 移動は中英語期には頻繁に生起してい

る。(17)がその一例である。

- (17) a. Plinie reporteth that griphes flie alwaies to the place of slaughter.

(R. Scot *Discov. Witchcr.* xi. xiii. (1886) 162, *OED*)

- b. In doleful wise they ended both their days

(Marlowe, *The Jew of Malta*, III, iii, 21, Roberts (1993: 253))

- c. He come not in company.

(*Cursor M.* 17288 *Resurrection* 163 (Cott.), *OED*)

(17)の a では、副詞 always の前に、b の例では浮遊数量詞 both の前に、c の例では否定辞 not の前にそれぞれ動詞が生起している。これらの例は V-to-T 移動の具体例であるが、こうした動詞の移動は16世紀の後半にはほぼ消失しており (Roberts (1993) 参照)、現在の英語では全く観察されない。

- (18) 15世紀

And the erthe and the lond chaungeth often his color.

And the earth and the land changes often its color

(*Mandeville's Travels* ix.100, *OED*)

- (19) 16世紀

Worldly chaunces..in adversitye often change from evell to good and so to better.

(Hall, *Chronicle of Henry VII*, 8, *OED*)

このように英語においては、平叙文でまず V2が消失し、続いて V-to-T 移動が消失していく。こうした循環的動詞移動の消失はフォース標示の際の Fin への動詞移動の牽引力の弱化和関係がある。古英語期にはフォース標示の活性化とその強さのため、Force から [+attract] の素性が Fin に継承されて、Fin に動詞が牽引される。実際、古英語ではドイツ語と同じく V1が観察されていた。

- (20) Com þa to lande lid-mamma helm (Beo 1623)

came then to land sailors protector

“Then the protector of the sailors came to the shore.”

(Hinterhölzl and Petrova (2010: 310))

さらに古高地ドイツ語においても V1が観察されている。

- (21) 古高地ドイツ語

Was liutu filu in flize, in managemo agaleize (OII, 1)

were people many in diligence in great effort

“There were many people in ddiligence, in great effort.”

(Hinterhölzl and Petrova (2010: 310))

こうした V1は談話倒置 (narrative inversion) と呼ばれているが、フォース標示が具現化していることは明らかである。これに何らかの要素が前置されると V2となる。しかし、Fin への動詞牽引力が減退し、15世紀の後半までには T までしか上がってこなくなる。この段階では V-to-T 移動はまだ存在する。そして時間の経過とともにさらに動詞の牽引力が及ばなくなり、16世紀の後半には V-to-T 移動が消失する。このように英語においては Fin への動詞移動の牽

引力が循環的に衰退して行ったのである。

Fin への動詞移動の牽引力が減退して行くという予測は他の言語にもあてはまる。Roberts (1993) によると、古フランス語では古英語そして古高地ドイツ語と同じく V1そして V2を示していたということである。

- (22) 古フランス語 V1

Voit le li rois

Sees him the king

- (23) 古フランス語 V2

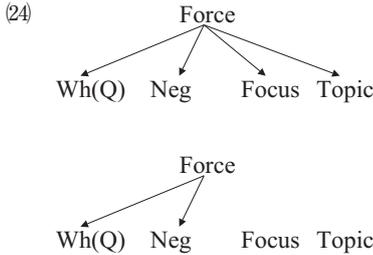
Or voi ge bien, plains es de mautalant

Now see I well full are(you) of bad intentions

フランス語は SVO 言語であるが、上記のように古フランス語は V1, V2を持っていることから、英語と同じく当時は Fin に動詞が移動し、フォース標示していたことが分かる。しかし、現代フランス語では V2は消失しているが、V-to-T 移動は存在する。つまり、これは Fin への動詞移動の牽引力が時間の経過とともに T までしか及ばなくなったことを意味している。英語は平叙文において V-to-T 移動を失った言語であるが、フランス語はまだ T への動詞牽引力を保持している言語であるということである。

英語の V2の消失は、話題化、焦点化の場合である。英語においては前述のように、wh 疑問文や否定辞倒置では残余の V2 (residual V2) を持ち、V2は存続している。宗正 (2018) で見たように、これは文法化の一つと考えられる。例えば、迂言の do の文法化を考えてみると、Ellegård (1953) の古典的分析によれば、do は中英語期に最初は脚韻と整えるため韻文で用いられ始めたという。また、使役動詞の働きを持つ時期があり、その後ろに目的語 + 原形不定詞という形をとっていた。その後目的語が省略されるようになり、後ろに来る原形不定詞の意味上の主語が分からなくなっていく。さらに make や let などの使役動詞との競合で次第に使用されなくなる。その後、Samuels (1972) が言うように、未完了相・進行相を表すアスペクト・マーカーとして用いられるようになるが、文法化には至らなかった。しかし、今日イギリス南西部のサマセット及びドーセット方言では肯定平叙文において反復的あるいは習慣的行為を表すアスペクト・マーカーとして文法化されている。後の16世紀以降には、疑問文や否定文、命令文に do が使用されるようになる。このように do はある機能が文法化されたり消滅したりする過程を経ている。

これと同じく、話題化、焦点化における V2の消失は、それらが Fin への動詞移動と結びつかなくなった、換言すると話題化、焦点化においてはフォースは活性化するがそれが強力ではなく、従って Force から [+attract] の素性が Fin に継承されず、Fin に動詞が牽引されることがなくなるといった一種の文法化の結果である。



3. MoodP 再考

前節では、Force に主要部移動に関わる [+attract] の素性が指定されることと、それに起因する Fin への動詞の移動とその循環的消失について見てきた。前述のように、左周辺部には多様な機能範疇から成る豊かな内部構造が形成される。動詞の移動にはこれらの機能範疇にさらに加わる可能性がある範疇があり、具体的には宗正 (2019b) で見た Force と Fin の間に生起する心態の表現と関わる範疇である。宗正 (2019b) での議論の繰り返しになるが、ここで再びその範疇を帰納的に導き出すとともに、その帰結について考えていくことにする。

まず英語の疑問文においてであるが、次の例のように、英語では wh 疑問詞の後にそれと同格的要素をおくことは可能であるが、それは離接的 (disjunctive) な要素であるため、連結的 (conjunctive) な要素は不可能である。

(25) They asked who, {John or Bill/*John and Bill}, could help her.

離接的な要素を後続することができるのは、疑問文がどちらか分からない (uncertain) という意味を持ち、それがどちらという形態を持つ離接的な要素と意味的に結びつくからである。このどちらか分からないという意味は心態の表現 (mood) に関わる。そこで、その意味に関わる範疇を便宜上 MoodP とし、暫定的に左周辺部の FinP の上に投射すると考える。MoodP という名称の投射は既に提案されている。Cinque (1999) の分析にもそれが見られるが、Cinque は副詞には主観性が反映され、それには次のような階層性があることを主張している。

(26) MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} > MoodP_{evidential} > MoodP_{epistemic} > TP (Past) > TP (Future) > MoodP_{irrealis} > ModP_{alethic} > AspP_{habitual} > AspP_{repetitive} > AspP_{frequentative} > ModP_{volitional} > AspP_{celerative} > TP (Anterior) > AspP_{terminative} > AspP_{continative} > AspP_{retrospective} > AspP_{proximative} > AspP_{durative} > AspP_{generic/progressive} > AspP_{prospective} > ModP_{obligation} > ModP_{permission/ability} > AspP_{completive} > VoiceP > AspP_{celerative} > AspP_{repetitive} > AspP_{frequentative}

ここで提案する MoodP は上記のような MoodP とは名称は一緒であるが、どちらか分からないという心態の表現を表すということ、及び FinP の上に投射するという点で異なっ

ている。

ここで提案する MoodP が ForceP と FinP の間に投射するという根拠となるのが、ゲルマン語に観察される疑問文中の二重詰め COMP (doubly filled-COMP) 現象である。標準英語では二重詰め COMP は容認されないが、他のゲルマン系の言語では容認される言語が多く存在する。オランダ語、フリジア語、西フラマン語、スイスのドイツ語 (Swiss German)、アイスランド語等がそうである (de Haan and Weerman (1986), Reuland (1990), Haegeman (1992), Hoekstra (1993) 参照)。これらの言語の内オランダ語を見てみよう。

(27) オランダ語

a. Ik vraag me af of dat Ajax de volgende ronde halt.

I ask me PRT if that Ajax the next round reaches

“I wonder whether Ajax will make it to the next round.”

b. Ze weet wie of dat hij had willen opbellen.

she knows who if that he had wanted call

“She knows who he wanted to call.”

(Bayer (2004: 65))

上記の例は両者とも間接疑問文であるが、二重詰め COMP にさらに小辞の of が加わっている。特に b の例では、wh 疑問詞にその of が続き、その後補文標識が出現している。この of は小辞と考えられるが、意味としてはどちらか分からない (uncertain) という意味を持っている。カートグラフィーに従えば wh 疑問詞は Q の位置に生起し、補文標識は Fin に生起するため of の位置はその間にあることになる。

(28) [ForceP [Q [MoodP [FinP [TP [vP ...

こうしたオランダ語の現象に類似した現象がセルボ・クロアチア語 (Serbo-Croatian) にも観察される。

(29) セルボ・クロアチア語

a. Dali da Vesna pročitla ovu knjigu?

whether SUBJ Vesna read 3SG this book

“Should Vesna read this book?”

b. Kojuu knjigu da Vesna pročitla?

which book SUBJ Vesna read 3SG

“Which book should Vesna read?”

(Isac and Jakab (2004: 328))

上記の例において wh 疑問詞の後に叙想法マーカー da が生起しており、それがどちらか分からないという意味として具現化している。

前述のように、英語の疑問文においては MoodP に何らかの要素が顕在的に生起することはないが、これは一つの言語差異であり、英語の場合は MoodP の主要部に空範疇が生起していると考えられる。Wh 疑問文の場合、主節では Q に wh 句が入り、MoodP の主要部には uncertain の意

味を持つ空範疇が入る。この場合、wh 演算子の値が分からないので聞き手に対してその値を尋ねるということであるので、疑問のフォースが活性化し、それが強いので [+attract] の素性が Force に指定され、それが素性継承により Fin に継承される。これにより Fin に助動詞又は迂言的 do が牽引されて主語・助動詞倒置が生起する。

(30) a. Wh-question

[ForceP Force [wh Q [MoodP Mood [FinP AUX-Fin [...

b. Yes-no question

[ForceP Force [OP Q [MoodP Mood [FinP AUX-Fin [...

Yes-no 疑問文においては、Q の指定部には wh 演算子の代わりに空演算子が入り、MoodP の主要部には wh 疑問文と同じく uncertain の意味を持つ空範疇が入る。この場合、命題の真偽値が分からないので聞き手に対してその値を尋ねるということであるので、疑問のフォースが活性化し、それが強いので [+attract] の素性が Force に指定され、それが素性継承により Fin に継承される。これにより Fin に助動詞又は迂言的 do が牽引されて主語・助動詞倒置が生起する。Yes-no 疑問文の場合の Q の指定部に入る空演算子に関してであるが、通時的には yes-no 疑問文にも wh 疑問文と同じく、wh 演算子の whether が Q の指定部に入っていた時期があった。こうした現象は古英語期から観察されている。

(31) Old English

Hwæðer ge nu secan gold on treowum?

Whether you now seek gold trees?

“Do you now seek gold in trees?”

(Radford (1988: 296))

Radford (2004: 220) の報告によると、whether を用いた yes-no 疑問文はエリザベス朝の英語でも観察され、この時期にはさらに主語・助動詞倒置が生じていたということである。

(32) a. Whether had you rather lead mine eyes or eye your master's heels?

(Mrs Page, *The Merry Wives of Windsor*, III, ii)

b. Whether dost thou profess thyself a knave or a fool?

(Lafeu, *All's Well That Ends Well*, IV, v)

このように古英語期から yes-no 疑問文は (助) 動詞を文頭に移動させて表すこともあったが、wh 演算子の whether を導入する選択肢も生まれ、エリザベス朝の時期には両者を混在させた選択肢も可能となっている。現代英語では主節の疑問文において、whether を導入する選択肢はなくなっているが、その代わりに wh 疑問文で導入される wh 演算子と同じく Q の指定部に空演算子を導入することになったのであろう。また、yes-no 疑問文においては命題の真偽値が分からないため聞き手に対してそれを尋ねるのであるから、その分からないという意味を持つ空範疇が MoodP の主要部に入っていることは時代を通じて変わらない (cf. Baker (1970), Grimshaw (1993), Roberts (1993))。

ただ、英語の場合はオランダ語やセルボ・クロアチア語と異なりその空範疇が顕在化しないだけである。

標準英語の補文の間接疑問文においては、wh 疑問文では Q の指定部に wh 句が入り、MoodP の主要部に空範疇が生起する。主語・助動詞倒置に伴う助動詞または迂言的 do の Fin への移動は、主節の疑問文と異なり生じない。

(33) a. Wh-question

...[ForceP Force [wh Q [MoodP Mood [FinP Fin [...

b. Yes-no question

...[ForceP Force [whether Q [MoodP Mood [FinP Fin [...

c. Yes-no question

...[ForceP Force [Q [MoodP if-Mood [FinP Fin [...

間接疑問文の yes-no 疑問文においては、主節と異なり whether が生じるが、その生起位置は wh 演算子と同じく Q の指定部になる。しかし、間接疑問文では whether と同様 if も生起可能である。なぜ if が間接疑問文に生起可能になったかはよく知られているように、元々 if は条件を表す接続詞であるが環境によって疑問文のように解釈が可能になる場合があるからである。例えば、下記の例において、if 節は条件節とも解釈可能であるし、疑問を表す節としても解釈可能である。

(34) I hope you will tell me if you can come.

条件を表す if 節は、意味的には if 以下の命題が成立するかしないかが uncertain の状態にある。疑問文も前述のように uncertain の意味を持っている。こうした類推により、if が間接疑問文を形成するものとしての地位を獲得したのである。その生起位置であるが、それは MoodP の主要部であり、uncertain を表す空演算子は指定部に入っていると考えられる。If が Fin より前に位置していることの根拠は、次のように中英語期に if that といういわゆる二重詰め COMP が広く容認されていたという事実である。

(35) If that they were put to such assayes The gold of hem hath now so badde alayes With bras, that..It wolde rather brest in two than plye.

(Chaucer *Clerkes T.* 1110, *OED*)

補文標識は Fin に生起するので、if はその前の投射である MoodP の主要部ということになる。

上記のような、間接疑問文に現れる if は wh 疑問詞 whether と異なった特徴を示す。

(36) a. Do you know {whether/if} she would marry him?

b. Do you know {whether/*if} to marry him?

(36)にあるように、whether と if は定形節を後ろに従えることができるが、if は不定詞節に従えることができない。これは不定詞節が疑問節として wh 句のみをとる性質があり、if は元は接続詞であり wh 句ではないからである。また、次のように疑問節を等位接続した場合、wh 疑問節と if 節を等位接続した場合非文になる。

(37) I don't know what he wants and {whether/*if} he insists on having it now.

等位接続詞は同じレベルのものを接続するため、whether 疑問節と if 節は違うレベルであることが分かる。解釈においても次のような差がある。

- (38) a. I'm studying {whether/*if} I should take that line of action.
 b. I'm judging {whether/??if} I should take that line of action.
 c. You have to justify {whether/*if} your journey is really necessary.

(38)の補文は命題の真偽値の選択が明確になっている文である。そうした真偽値の選択を明確に示すことができるのは if ではなく whether である。このように間接疑問文での whether 疑問節と if 節には明確な差があるが、これは whether と if がそれぞれ違う位置に生起しているためである。ただし、両者に共通しているのは前述のように MoodP の主要部に uncertain を表す空範疇があることである。

4. 右周辺部の Mood

前節で見たように、文の左周辺部には ForceP が存在する。この Force の具現化であるが、当該の文が疑問文であれば疑問フォース (interrogative force) が明示され、平叙文であれば平叙文フォース (declarative force) が明示される。英語においては疑問フォースは do-支援等による主語・助動詞倒置により明示化される。しかし、日本語においては Force は英語のような統語的手段ではなく、小辞 (particle) を導入することで明示される。例えば、疑問文中に生じる「か」がその一例である。次の例は最後に「か」を導入することで、疑問文のフォース標示を行っている。

- (39) 君はその本を読みましたか？

その他のフォースに関わる例としては以下のようなものがある。

- (40) a. 犯人が逃げているよ。(強調)
 b. 死んでもしらんぞ。(強調)
 c. ビールが飲みたいなあ。(願望)
 d. あの絵美しいねえ。(感嘆)
 e. あの山登ってみたいよね。(勧誘)

こうした一連の小辞は発話フォースを表しているため ForceP の主要部に生起していると考えられる。

また、日本語においてはフォースは小辞が複数ある方が強い傾向にある。

- (41) a. あの子私を叩くの。
 b. あの子私を叩くのよ。

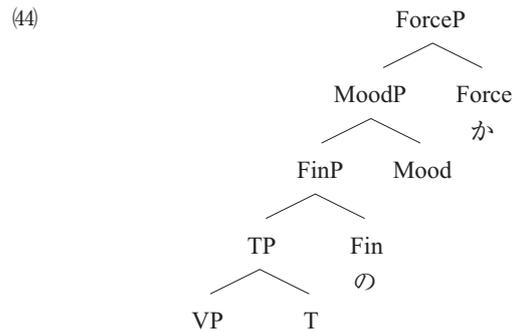
(41)に関しては、a よりも b の方がフォースの度合いが強い。小辞の「の」に関しては地域差があり、九州方言では上記の「の」が「と」になる。

- (42) a. あの子私を叩くと。
 b. あの子私を叩くとよ。

上記の「の」は疑問標示もできれば平叙文標示も可能である。「の」の生起位置であるが、それは Ono (2006), Hiraiwa and Ishihara (2012), Saito and Haraguchi (2012), Kuwabara (2013) の分析のように FinP の主要部に生起するという意見の一致が見られる。一方、疑問標示の「か」は上記のように疑問フォースを表すため ForceP の主要部である。

- (43) a. 誰がそのパーティに行くの？
 b. 誰がそのパーティに行くの か？

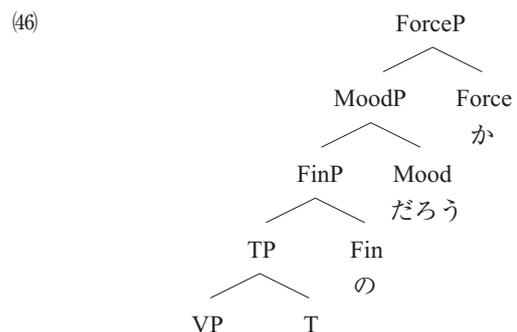
上記の例を句構造で示すと以下のようになる。



(43)において「の」、「か」の両方が生起する場合、疑問のフォースの度合いが強いが、次のように両者の間に推量を表す表現が挿入されることもある。

- (45) 誰がそのパーティに行く (の) だろう か？

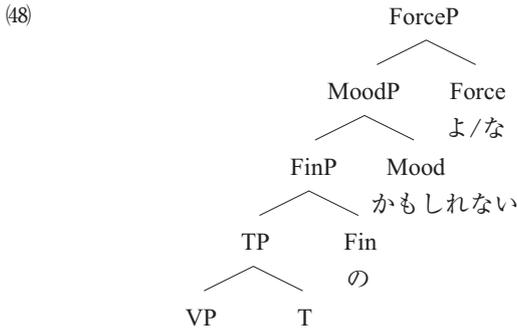
この推量を表す「だろう」の生起位置はどこになるのだろうか。「だろう」という推量を表す表現は心態の表現でもあるので、その生起位置は MoodP であると考えられる。「の」は前述のように Fin に生起し、「か」は Force に生起した。本稿では MoodP は ForceP と FinP の間にあることを見てきた。従って、「だろう」という推量を表す表現は MoodP の主要部に生起していることになる。



可能性を表す「かもしれない」も心態の表現に入ると思われるが、これも次の例のように「の」の上に導入されることがある。

- (47) いつもあそこで勉強している の かもしれない よ/な

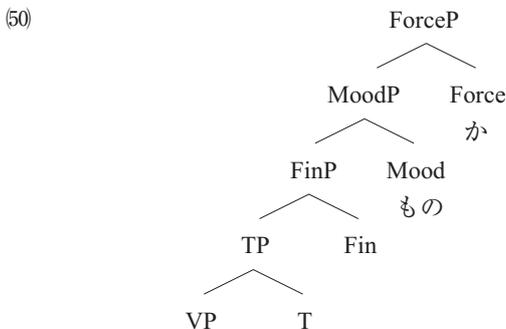
この例において「よ」、「な」は平叙文での断定フォースを表す小辞であり ForceP の主要部に生起していると考えられる。



前章から心態の表現に含まれるものとして不確かさ又は不定性を見てきたが、他に心態の表現に含まれるものとして反語、感嘆が挙げられる。

- (49) a. 誰が行く か
 b. 誰が行く もの か

上記の例は反語の例であるが、反語を表す「か」の下に心態の表現としての「もの」を生起させることが可能である。



「か」で反語を表すことは可能であるが、「もの」が入っても同じく反語を表すことができるため、「か」だけのものは Mood が顕在化しなかった場合で、「もの」が入ったものはそれが顕在化した場合であると言える。

次の例は感嘆文である。

- (51) a. あの部屋のなんと寒い こと (か)
 b. *あの部屋のなんと寒い か こと

驚き、感嘆、詠嘆は心態の表現と考えられる。従って、上記のような例では、感嘆を表す「こと」は MoodP に生起していることが予測される。このように「こと」は感嘆文に生起することができるが、単独で生じる場合もあれば「か」と共に生じる場合もある。この場合、「か」の方が上位に生じる。また、次の例のように感嘆文において前述の「だろう」が共に生起する場合がある。

- (52) 太郎はなんと賢い の だろう か

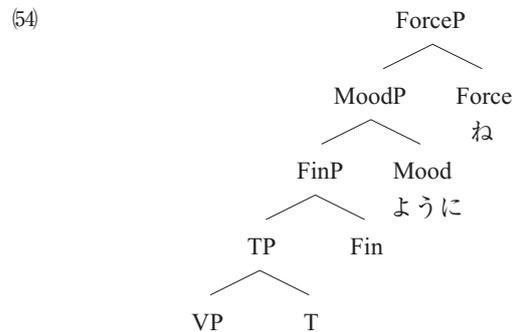
この場合、「の」は Fin に、「だろう」は Mood に、「か」は Force に入っていると考えられるが、「だろう」と「か」が連動して感嘆を表しているように見える。

次に命令を表す小辞を見てみよう。命令は心態の表現のうちの一つであるが、それは「ように」という形で表されることが多い。

- (53) a. 宿題をすぐする ように
 b. 宿題をすぐする ように ね

上記の例のように「ように」は命令を表しているが、それ

は ForceP の主要部に生起していると考えられる「ね」(「ね」は念を押している)の前に来ているため、「ように」は Mood に生起していると考えられる。



また、命令を表す小辞として「こと」があるが、それは以下の例のように文尾に来る。ForceP の主要部に生起するものがないので定かでないが、命令を表すことから「ように」と同じ位置に生起しているものと考えられる。

- (55) 宿題をすぐする こと

また、「ように」は命令を表すが、場合によって祈願を表すことがあり、同じく文尾に生起する。

- (56) a. あの大学に受かります ように
 b. 神の御加護があります ように

祈願も心態の表現であるため上記の「ように」は Mood に生起していると考えられる。

全てを見てきたわけではないが、要求、提案、依頼、希望、不確実な想像、不確かさ、願望、祈願、不定性、ポライトネス、驚き、感嘆、詠嘆、不満、反語等は心態の表現に含まれる。これまで見てきたことから判断すると、心態の表現は MoodP と関わっており、それが MoodP の主要部に空の形か或いは顕在化するということである。つまり、英語と同じく日本語においても MoodP は ForceP と FinP の間、正確には FinP の上にあり、その主要部が空の状態であるか、語彙化されるかの違いはあるが、心態の表現が関わっている場合は範疇として必ず生起するということである。英語は左周辺部を呈する言語であるが、日本語は右周辺部を呈する言語である。こうした、左、右を問わず MoodP は存在し、それが FinP の上に投射する。¹

5. 心態の表現

次に心態の表現についてさらに詳しく見ていこう。心態の表現に関しては、前述のように様々な種類がある。例えば、要求、提案、依頼、希望、不確実な想像、願望、祈願、不定性、ポライトネス等がある。英語においては要求、提案、依頼、希望、願望を表す動詞の補文は假定法現在になり、アメリカ英語では動詞は原形になり、イギリス英語では法助動詞の should が生じる。いわゆる感情を表す should である。

- (57) a. We desire that they (should) visit us more often.
 b. They proposed that the hospital (should) be built.

c. We want that they (should) come to the party.

イギリス英語における should に関しては、要求、提案、依頼、希望、願望を表す動詞の補文は、そうした動詞がそれぞれ心態の表現を表すものであるため、下記のように動詞補文の心態の表現と関わる MoodP の主要部が活性化し、それが素性継承によって T に継承されるために should が生起していると考えられる。

(58) ... V [_{ForceP} Force [_{MoodP} Mood [_{TP} T [_{VP}]]]]

中古日本語においても下記の例のように同様の現象が観察され、不定要素「か」が文中に生起すると、これに呼応する形で「ム系」の助動詞が生起する。これは不定要素は心態の表現になるため、MoodP の主要部に「か」が生じ、その素性の継承によって「ム系」の助動詞が生起するのであろう。

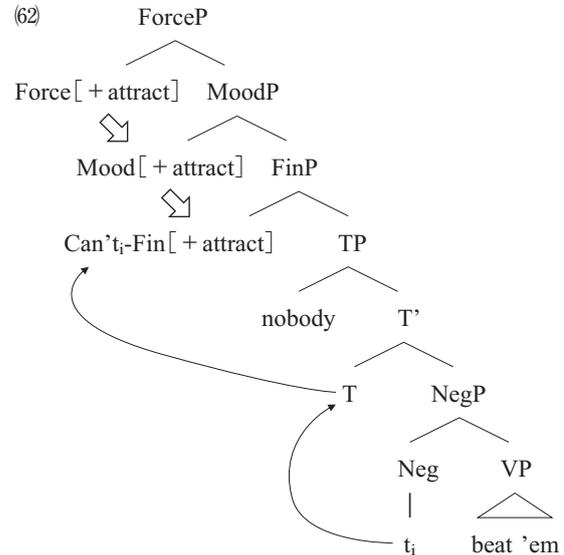
- (59) a. 梓弓引き豊国の鏡山見ず久ならば恋しけむ か
も (万葉集, 按作村主益人, 311)
b. 取り出でても、さまあしからむ か
(落窪物語)
c. 今は昔、八幡大菩薩、前生に此の国の帝王と御しける時、夷討む か 為軍を引将て自ら出立せ給けるに、多の人の命を殺させ給ひける
(今昔物語集, 第十二巻)

否定に関しては、宗正 (2019b) で不定性はそれ自身否定的な意味を持っており、Mood と関連しているのを見たが、同じく否定も心態の表現として Mood に指定されるものと考えられる。通常否定辞は TP と VP の間に投射する NegP の主要部に生起するが、宗正 (2012) の素性の上層部への浸透があり、それが正しいとすると、否定辞を持つ Neg 素性は素性浸透によってそれより上部の投射範囲に浸透することになる。従って、否定辞は NegP の主要部に生起するが、否定の意味は素性浸透により Mood にも指定されることになる。もし、否定を強調して表明するのであれば、予測として Force に [+attract] の素性が指定され、それが Mood, Fin に循環継承されることによって (助) 動詞が Fin に牽引され、倒置が生じることになる。実際、African-American Vernacular English (AAVE) では否定文において否定呼応 (negative concordance) が生じ、否定辞が倒置を起こして文頭に生じる場合がある。この場合、文は疑問文ではなく断定文であり、疑問文に見られるイントネーションの上昇がなく下降調になる。

- (60) a. I did nothing. (Standard English)
b. I didn't do nothin'. (AAVE)
(61) a. Can't nobody beat 'em. (Cleveland, 11, Labov et al., ex. 367)
b. Ain't no white cop gonna put his hands on me. (NYC, Jets, 16, Labov et al., ex. 353)
c. Ain't nothin' happenin'. (NYC, Jets, 16, Labov et al., ex. 350)

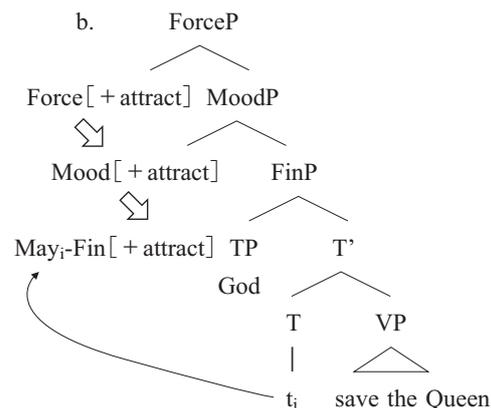
(Sells et. al (1996: 592))

AAVE のこうした倒置文においては、標準英語と異なり、Force が活性化して [+attract] の素性がそこから Mood そして Fin に循環継承され、否定辞が Fin に牽引されると言えよう。



祈願に関しては、これもまた心態の表現であるので、MoodP の主要部にそれが反映される。英語においては、祈願法は助動詞 may を文頭に置き、倒置が生じる。これは MoodP の Mood に祈願を表す素性が指定され、祈願を表明する Force が活性化する。その活性化が強いのので、Force に [+attract] の素性が指定され、素性継承によってそれが Mood そして Fin に循環継承される。これにより may が T から Fin に牽引され倒置が生じる。

(63) a. May God save the Queen!



上記の例は、Force が活性化し、 [+attract] の素性が指定されると、Fin に素性継承され、その継承によって Fin に (助) 動詞が牽引されるのと同じメカニズムで形成されている。日本語においては、前述のように、「ように」が文尾に生起するが、この語は MoodP の主要部に生起していると考えられる。

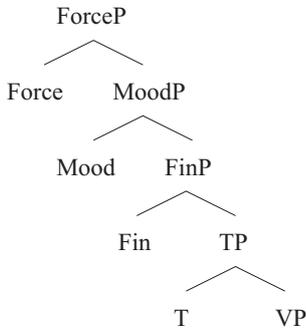
(64) a. あの大学に受かります ように

b. 神の御加護があります ように

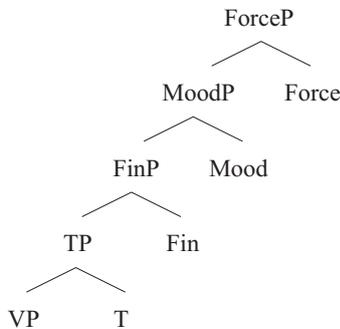
日本語の「です」、「ます」といった丁寧語はポライトネ

スに関するものであるため、心態の表現に範疇化される。そのため、「です」、「ます」といった丁寧語は MoodP の主要部に生起していると考えられる。こうしたことと、上記のことを考え合わせると、日本語は英語と鏡像関係にある以下のような構造を持っていると考えられる。

(65) 英語タイプ



(66) 日本語



現代日本語は古語と比較すると、Force や Mood を表す小辞、正確には終助詞が発達してその種類もかなり増加している。下記は明治時代以降に観察される終助詞を国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を検索アプリケーション「中納言」を用いて抽出した結果である（左は終助詞の種類、右は出現頻度を表す）。²

(67) 終助詞：明治・大正時代

あ	1	ぜえ	1	に	1	もの	635
い	1138	そ	38	ね	5775	もの お	3
お	183	ぞ	799	ねえ	900	もん	4
か	15678	ぞい	24	ねへ	65	や	449
かあ	22	ぞう	4	ねん	3	やー	2
かし	214	ぞー	4	の	1230	やあ	6
がし	13	ちや	4	のう	107	やあい	1
かしら	156	つけ	142	のえ	7	やい	1
かしらん	59	つちや	5	のお	7	やれ	32
かな	3175	て	57	のー	1	よ	7680
がな	8	で	36	のふ	6	よう	47
かも	1	てん	2	のん	2	よお	5
がも	2	な	2956	は	10	よー	9
くさ	9	なあ	577	ばい	6	よん	4
け	101	なー	11	ばや	70	ら	55
さ	1579	なう	59	へ	54	らあ	13
さあ	33	なし	4	べ	29	ろ	127
しか	4	なふ	3	べい	38	わ	1960
しが	26	なむ	1	べえ	12	り 哩)	14
せ	17	なも		もが	60	ゑ	9
ぜ	406	なん	22	もがも	1	を	577

このように日本語は Force や Mood を表す小辞が豊かであるが、朝鮮語も同じく Force や Mood を標示する小辞が日本語のその数には及ばないが存在する。そこで次に朝鮮語の小辞について考察し、ForceP, MoodP, FinP の配列、階層についてその経験的証拠となるものを見てみることにする。

6. 朝鮮語のフォースと Mood

日本語は膠着言語であり、小辞である終助詞の種類が豊富である。この終助詞はその文のフォースや心態の表現を表し、それが様々な形で具現化する。膠着言語にはこうした終助詞に相当する小辞が存在するが、日本語と同じ膠着語である朝鮮語もフォースや心態の表現を表す小辞が豊かでありそれが文尾に現れる。朝鮮語は日本語と同じく SOV 言語であり、文尾の動詞にフォースや心態の表現を表す小辞が付加する。次の例は朝鮮語の具体例である（例はすべて Pak (n.d.) からのものである）。

- (68) a. DECLARATIVE
Na-nun cemsim-ul mek-ess-ta.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- b. INTERROGATIVE
(Ne-nun) cemsim-ul mek-ess-ni/nya?
(You-TOP) lunch-ACC eat-PST-INT (Q)
“Did you eat lunch?”
- c. IMPERATIVE
Cemsim-ul mek-e-la. Lunch-ACC eat-IMV
“Eat lunch!”
- d. EXHORTATIVE (PROPOSITIVE)
Icey cemsim-ul mek-ca.
Now lunch-ACC eat-EXH
“now, let us eat lunch.”
- e. PROMISSIVE
Nay-ka nayil cemsim-ul sa-ma.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”
- f. PREMONITIVE
Tachi-lla
Get hurt-PRE
“(Be careful.) You may get hurt.”
- g. PERMISSIVE
A. Kwaca mek-eto toy-yo? Cookie eat-? okay-INT
“it okay to eat the cookies?”
B. eung, mek-ulyum(una).
Yes. Eat-PER
“Yes. It is okay to eat.”
- h. EXCLAMATIVE
Ahyu, coyonghay-ela. Oh, quiet-EXC
“Oh, it’s quiet!”
- i. OPTATIVE
Wuli-lul yongsehay cwu-sose.
Us-ACC forgive give-DEC
“Forgive us.”
- j. PRESUMPTIVE
Nayil pi-ka o-kess-ta.
Tomorrow rain-NOM come-PRE-DEC
“It may rain tomorrow.”
- k. APPERCEPTIVE
John-I cip-ey ka-ass-kwun-a.
John-NOM home-to go-PST-APE-DEC
“John went home.”

これらの例の特徴としては、動詞にフォースや心態の表現を表す小辞が付加しそれぞれの文のタイプが分かることである。また、Pak (n.d.)によると、それぞれの文には細分化としてスピーチレベルのポライトネスがあり、それを表す小辞が生起するという。

- (69) DECLARATIVE
- a. PLAIN
Na-nun cemsim-ul mek-ess-ta.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- b. INTIMATE
Na-nun cemsim-ul mek-ess-e.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- c. FAMILIAR
Na-nun cemsim-ul mek-ess-ney.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- d. POLITE
Na-nun cemsim-ul mek-ess-eyo.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- e. SEMIFORMAL
Na-nun cemsim-ul mek-ess-o.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- f. FORMAL
Na-nun cemsim-ul mek-ess-sup-ni-ta.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”
- g. SUPERPOLITE
Na-nun cemsim-ul mek-ess-nai-ta.
I-TOP lunch-ACC eat-PST-DEC
“I ate lunch.”

(70) Speech Level Declarative Particles

PLAIN	-ta
INTIMATE	-a-/e
FAMILIAR	-ney
POLITE	-a-yo/-e-yo
SEMIFORMAL	-o/-uo/-so
FORMAL	-(su)p-ni-ta
SUPERPOLITE	-na-i-ta

- (71) INTERROGATIVE
- a. PLAIN
Ne-nun cemsim-ul mek-ess-ni/-nya?
You-TOP lunch-ACC eat-PST-INT
“Did you eat lunch?”
- b. INTIMATE
Ne-nun cemsim-ul mek-ess-e?
I-TOP lunch-ACC eat-PST-INT
“Did you eat lunch?”
- c. FAMILIAR
Ne-nun cemsim-ul mek-ess-na/-nun-ka?

You-TOP lunch-ACC eat-PST-INT

“Did you eat lunch?”

d. POLITE

Tangsin-un cemsim-ul mek-ess-e-yo/nayo/-nun-ka-yo?

You-TOP lunch-ACC eat-PST-INT

“Did you eat lunch?”

e. SEMIFORMAL

Tangsin-un cemsim-ul mek-ess-o?

You-TOP lunch-ACC eat-PST-INT

“Did you eat lunch?”

f. FORMAL

Tangsin-un cemsim-ul mek-ess-sup-ni-kka?

You-TOP lunch-ACC eat-PST-INT

“Did you eat lunch?”

g. SUPERPOLITE

Cenha, cemsim-ul tu-si-ess-na-i-kka?

King, lunch-ACC eat (honorific form)-SH-na-ID-PST-INT

“King, did you eat lunch?” (SH-subject honorific marker, ID-indicative morpheme)

(72) Speech Level Interrogative Particles

PLAIN	-ni/-nya
INTIMATE	-e
FAMILIAR	-na/-nun
POLITE	-yo/nayo/-nun-ka-yo
SEMIFORMAL	-o
FORMAL	sup-ni-kka
SUPERPOLITE	na-i-kka

(73) IMPERATIVE

a. PLAIN Cemsim-ul mek-e-la/ulyem.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

b. INTIMATE

Cemsim-ul mek-e.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

c. FAMILIAR

Cemsim-ul mek-key (-na).

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

d. POLITE

Cemsim-ul mek-e-yo.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

e. SEMIFORMAL

Cemsim-ul mek-uo.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

f. FORMAL

Cemsim-ul tu-u-si-p-si-o.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

g. SUPERPOLITE

Cemsim-ul tu-si-op-ose.

Lunch-ACC eat-IMV

“Eat lunch!”

(74) Speech Level Imperative Particles

PLAIN	-(a/e)-la, ulyem
INTIMATE	-e
FAMILIAR	-key(na)
POLITE	-e-yo
SEMIFORMAL	-uo
FORMAL	-(si-p)-si-o
SUPERPOLITE	-(si-op)-so-se

(75) EXHORTATIVES

a. PLAIN

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-ca.

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

b. INTIMATE

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-e.

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

c. FAMILIAR

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-sey(-na).

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

d. POLITE

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-e-yo.

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

e. SEMIFORMAL

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-u-p-si-ta.

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

f. FORMAL

Wuli icyey cemsim(-ul) mek-u-si-p-si-ta.

We now lunch(-ACC) eat-EXH

“Now, let’s eat lunch.”

(76) Speech Level Exhortatives

PLAIN	-ca
INTIMATE	-e
FAMILIAR	-sey(-na)
POLITE	-e-yo
SEMIFORMAL	-u-p-si-ta
FORMAL	-u-si-p-si-ta

(77) PROMISSIVE

a. PLAIN

Nay-ka nayil cemsim-ul sa-ma.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

b. INTIMATE

Nay-ka nayil cemsim-ul sa-a/l-kkey.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

c. FAMILIAR

Nay-ka nayil cemsim-ul sam-sey.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

d. POLITE

Nay-ka nayil cemsim-ul sa-a-yo/l-kkeyo.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

e. SEMIFORMAL

Nay-ka nayil cemsim-ul sa-li-ta/kess-o.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

f. FORMAL

Nay-ka nayil cemsim-ul sa-o-li-ta/kess-nai-ta.
I-NOM tomorrow lunch-ACC buy-PRM
“I will buy you lunch tomorrow.”

(78) Speech Level Promissive Particles

PLAIN	-ma
INTIMATE	-a/l-kkey
FAMILIAR	-sey
POLITE	-yo/-l-kkey-yo
SEMIFORMAL	-li-ta/ -kess-o
FORMAL	-o-li-ta/ -kess-nai-ta

(79) PREMONITIVE

PLAIN

Tachi-l-la Get hurt-PRE
“(Be careful.) You may get hurt.”

(80) PERMISSIVE

a. PLAIN

A. Kwaca mek-eto toy-yo?
Cookie eat-? Okay-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Kulay, mek-ulyem.

Yes. Eat-PER

“Yes. It is okay to eat.”

b. INTIMATE

A. Kwaca mek-eto toy-yo?

Cookie eat-? Okay-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Kulay, mek-e.

Yes. Eat-PER

“Yes. It is okay to eat.”

c. FAMILIAR

A. Kwaca mek-eto toy-yo?

Cookie eat-? Okay-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Kulay, mek-ulyum-una.

Yes. Eat-PER

“Yes. It is okay to eat.”

d. POLITE

A. Kwaca mek-eto toy-yo?

Cookie eat-? Okay-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Ney, mek-e-yo.

Yes. Eat-PER

“Yes. It is okay to eat.”

e. SEMIFORMAL

A. Kwaca mek-eto toy-yo?

Cookie eat-? Okay-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Ney, mek-uo.

Yes. Eat-PER

“Yes. It is okay to eat.”

f. FORMAL

A. Kwaca mek-eto toy-p-ni-kka?

Cookie eat-? Okay-AH-ID-INT

“Is it okay to eat the cookies?”

B. Ney, tu-si-p-si-o.

Yes. Eat-SH-AH-RQ-PER

“Yes. It is okay to eat.” (AH-addressee honorific morpheme, RQ-requestive mood morpheme)

(81) Speech Level Permissive Particles

PLAIN	-(u)lyem
INTIMATE	-e
FAMILIAR	-una
POLITE	-e-yo
SEMIFORMAL	-uo
FORMAL	-o

(82) EXCLAMATIVE

PLAIN

Ahyu, tew-e-la.

Oh, hot-EXC

“Oh, it’s hot!”

(83) PREMONITIVE

PLAIN

Tachi-l-la

Get hurt-PRE

“(Be careful.) You may get hurt.”

(84) EXCLAMATIVE

PLAIN

Ahyu, tew-e-la.

Oh, hot-EXC

“Oh, it’s hot!”

上記の例から分かるように、朝鮮語は日本語と同じくフォースマーカが文尾に来て、それが文のタイプ及びフォース標示を行っている。特筆すべきは、そのフォースマーカの左に心態の表現を表すムードマーカが生起していることである。下記の例は許容 (permissive) を表す例であるが、許容を表すフォースマーカの左に要求ムード (requestive mood) を表す小辞が生起している。

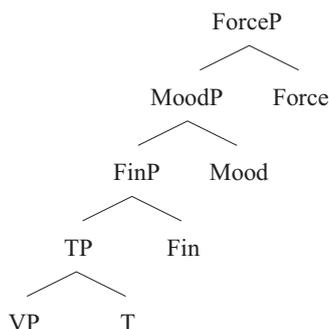
(85) Ney, tu-si-p-si-o.

Yes. Eat-SH-AH-RQ-PER

“Yes. It is okay to eat.”

英語とは対照的に、日本語は主要部後置の言語である。MoodP は ForceP と FinP の間にあることは既に見た。ただ、日本語は主要部後置の言語であるため英語と鏡像関係にあり、以下のような構造を持つ。

(86)

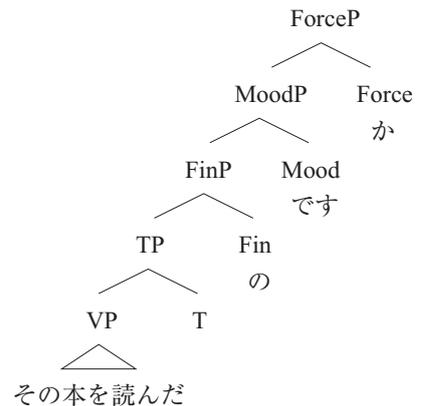


朝鮮語は前述のように日本語と同じく膠着語であり、主要部後置の言語である。上記の朝鮮語のフォースマーカやムードマーカの配列はまさに ForceP, MoodP, FinP の配列の存在及び階層性を裏付けるものである。

前述のように、日本語「の」は Fin に生起することを見たが、それ以外の終助詞はそれぞれの特徴により、Force または Mood に生起すると考えられる。例えば、次のような文では助詞が Force, Mood, Fin にすべて入った例であると言えよう (cf. 栗原 (2010))。

(87) a. その本を読んだの です か。

b.



上記の例において、「の」は前述のように Fin に、「です」はポライトネスを表すため Mood に、「か」は疑問を表すため Force に生起する。

英語とは異なり、日本語は終助詞が豊かであり、英語のように動詞を Fin に移動させてフォース標示を行う必要がない。英語に Force, Mood を表す終助詞が存在すれば、そこに小辞が生起することになる。前述のように、英語では Force が活性化し、それが強く活性化すれば、そこに [+attract] の素性が指定され、Fin にそれが素性継承されると (助) 動詞が Fin に牽引される。英語ではこの動詞移動が循環的に消失し、現在では余剩的 V2 として疑問文と否定辞倒置にのみ観察される。この動詞移動は Force の活性化に伴う現象であるが、日本語にもこうした現象が観察される事例がある。上代日本語から観察される係り結びである。俗説では室町時代に係り結びは消失したとされるが、その消失には Fin への動詞の移動の消失と関連していると思われる。次節では、この係り結びとその消失について考察することにする。

7. 係り結び

係り結びの研究は、古くは鎌倉時代の『手爾葉大概抄』で扱われている。江戸時代に入っては、本居宣長が実証的に研究し『詞の玉緒』において、係り結びを特定の助詞と文末の活用形との呼応関係としてその形式を明確にし、係り結びに対する認識の基礎を確立している。明治時代には、国語学者の山田孝雄が『日本文法論』において、係り結びに関係する助詞に「係助詞」という名前を与えて他の助詞と区別し、係り結びの内容、形式について一層厳密、明確に規定している。山田によると、ある種の係助詞「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」、「こそ」が上に現れる場合は、断定の強さによって活用形が連体形か已然形になるという。

(88) a. 吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山影にして (万葉集, 湯原王)

b. われさへ人げなくなむおぼゆる

(和泉式部日記85)

c. 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒浜

- 辺に (万葉集, 碁檀越妻)
 d. 葦辺より満ち来る潮のいや増しに思へか君が忘れかねつる (万葉集, 山口女王)
 e. 秋山の木の下隠り行く水の我こそまさめ思ほすよりは (万葉集, 鏡女王)

しかし、「は」、「も」といった係助詞が上にあれば終止形で結び、「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」が上にあれば連体形で終止するという事実、「こそ」の時は已然形になるのはなぜか、連体形、已然形という二つの活用形が強調の度合いとどのように結びつくのかは説明されていない。同じく明治時代に谷千生が係り結びは転置によって生じることを論じ、金沢庄三郎、亀田次郎も「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の連体形終止に関してはやはり転置または倒置による強調であると分析している。しかし、「こそ」の時は已然形になるのはなぜかという疑問に対しては明確な解答は出されていない。ところが、昭和時代になって石田春昭がそれに答えている。石田は万葉集のデータに基づき、「こそ」は物・時・事情を多くの中から選抜し、それを特別の題目または条件として強調し、その下の已然形の終止句と呼応して全体として逆接既定条件句を作るために已然形で終わると結論づけている。この「こそ」は平安時代には単純な強調へと変化していく。係助詞には「は」と「も」が含まれるが、松下大三郎は、これらは題目を提示するための助詞として機能していることを表明している。

大野 (1993) は上記の係り結びの研究をさらに発展させ、係助詞は以下のように大きく二つに分類できると主張している。

(89)

疑問詞を承けない	は・こそ	なむ・や
疑問詞を承ける	も・し	ぞ・か
	主部で働く：題目・条件の提示・強調	述部で働く：陳述の変容

疑問詞を承けない「は」、「こそ」、「なむ」、「や」の承ける語としては確定・既知・旧情報を表す語であり、疑問詞を承ける「も」、「し」、「ぞ」、「か」の承ける語としては不確定・未知・新情報を表す語であるという。「は」、「こそ」、「も」、「し」は働きとしては、本来、文の主部において、題目を提示して文を構成することが役目である。より具体的には、以下の通りである。

- (90) 「は」：個と個とを対比して提題し明確な答えを要求し、終止形などで終止する。
 「こそ」：衆から個を選抜し提題を行い、下の已然形と呼応する。多くの場合逆接条件句を形成するが、後に単純強調の働きを持つようになる。
 「も」：不確定または並立の題目を提示し、答えは否定・推量・反語などになる。
 「し」：順接条件句 (仮定・既定とも) を形成する。

「なむ」、「や」、「ぞ」、「か」は働きとしては本来、述部の末尾で働いたが、倒置によって文中に入り、強調の形式を作る。その場合、文末は名詞または連体形で終止する。より具体的には、以下の通りである。

- (91) 「なむ」：かねて抱く確信や伝聞・伝承を卑下謙遜の心、礼儀のわきまえをもって表明する働きを持つ。

「や」：古くは確信ある断定を相手につきつけ、後に推測・疑問を表明する働きを持つようになる。

「ぞ」：上から教示して強く断定することの表明を行い、事実を新情報として強調する働きを持つ。

「か」：自分自身で判断が不明であることを表明するが、後に相手に尋ねる時に使用されるようになる。

主部で働いた係助詞「は」は上代の用法を継承し、後世まで引き継いで使用されている。

「も」は「一つではない」こと、つまり不特定・疑問を承けることから、平安時代には次第に並立肯定的に提示をなし、文末も肯定的な陳述と呼応することが多くなる。その並立肯定割合は次第に増加し、「も」の文末が不特定あるいは不確定・否定で終わるという役目は次第に減少し、近世に至って係り結びの全般的な消滅に平行して、肯定的な並立・添加の題目提示の用法が7割を占めるに至って、「は」と「も」との構文上の既知・特定と不特定の対立的機能は稀薄となっていったという。

「こそ」は文末の已然形と呼応して逆接前提条件句を作っていたが、平安時代になると已然形は「ば」または「ど」、「ども」を添えずには使われなくなる。そのため、「こそ-已然形」の呼応という形式は、形式としては中世までおよそ保たれたが、その形式が発展の初期に役目として担っていた「こそ」が承ける語を否定的に強調し、文末に「……だけれど」、「……であるのに」の意を導く独特の意味上の型は、平安時代に入ると年とともに忘れられたという。そして、「こそ-已然形」は、已然形の機能の単純化と平行して、「こそ」の承ける語を肯定的に単純に強調する表現に移っていき、最も古い「こそ」が持っていた題目の提示よりも用法の幅を広げ単なる強調へと進行したという。

「こそ」が逆接条件句を作るのに対して、「し」は順接条件句を予告することを役目としていたため、「こそ」が逆接の条件句の形成から、承ける語を単純に強調する方向へ移っていったにつれて、「し」の必要性は薄れていく。従って、平安時代には「し」は衰退の兆しを見せ、「しも」にその座を譲るが、その「しも」もまた鎌倉時代には弱体化したという。

このように「は」、「こそ」、「も」、「し」という主部で働く係助詞の題目の提示、話題の場の設定という役目、文構成上の任務は「は」一つに寄っていき、他の「こそ」、「も」、「し」は次第に副助詞としての用法、程度の強調や並立の方向に寄っていったという。

「なむ」は内心に保つ確信を表すときに、丁重に礼儀をわきまえて表明する働きを持っていたが、平安時代に入ると、その用法を継承しながら、伝聞・伝承を、相手に対して下から謙退の態度で語る方へ寄っていき、「…なん…ける」のような形式化した使い方が増加したという。

「ぞ」は証拠を示して相手に上から教示するのに使われ、また未知の事態に気づいた時など強く断定を表出するために使われている。

「や」は奈良時代には確信を相手に突きつけるという働きを持っていたが、平安時代に入ると、推測を相手に突きつけるところから見込みを表明し、その見込みについてのイエス・ノーを相手に訊く形へと進展している。また、肯定的な用法として、「…や…や」と並立的ものを提示するにも使われ、文末に来て相手に宣言し、あるいは感情や感想を強調する用法が顕著になっていったという。

「か」は古くは内心における判断不能を表明する助詞で疑惑を意味していたのだが、平安時代には疑問詞と多くの場合共存し、疑いを表す働きを持つようになる。鎌倉時代以後、「か」は疑問と共存する形式を、「何…ぞ」、「誰…ぞ」のように「ぞ」に譲った点もあるが、「や」が肯定的に文末で強調する用法へと拡大するに対して、対照的に「疑問を表す」ことに徹していく。「か」は鎌倉時代以後、相手に問い直すためにも使われたが、疑問を明確に表明するという本来の座席を固く守り、「や」は並立助詞に追い込まれていったという。

「こそ」は前述のように、古くは選抜の結果を強く対象化するもので、その文末は否定を意味する逆接の条件句をなす用法であった。その後、承ける言葉の肯定的な単純な強調へと用法を拡大している。

係り結びとしての「こそ」は室町時代に消失しているが、その他の「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」はそれ以前に消失している。大野（1993）によると係り結びの消失は動詞の終止形が連体形に吸収されることによって生じたという。また、大野（1993）によると、終止形の連体形への吸収は既に鎌倉時代に始まっており、その「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」といった係助詞が結びによって連体形で終わることに起因するという。連体形終止の係り結びが一般に広く使われた結果、用言の連体形終止が広まり終止形が減ぼされるに至る。このことは同時に、「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の係り結びによる強調表現の一つの標識は係助詞を文中に用いるとともに、文末が終止形と相違する連体形をとるためであった。文末が連体形をとることは終止形との対立があってはじめて意味を持った。終止形と連体形の区別の消失は鎌倉時代初期に始まっており、文中に「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」を投入して文末を連体形としても、それは特別な活用形で結ぶという形式上の標識の価値を既に消失していたことを意味する。南北朝時代を経て室町時代になる

と古い終止形は使われなくなり、連体形が終止法と連体法を全く兼ねて表すようになる。そこで連体形終止であることを標識としていた「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の係り結びの効果は失われ、その用法は消滅していった。これが大野（1993）の係り結びの消失に関する説明である。

以上、係り結びに関する従来の分析について見てきたが、次節ではその消失について本稿での枠組みで考察していくことにする。

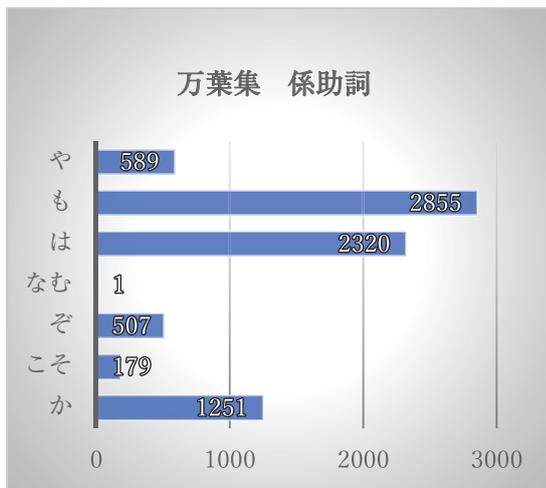
8. 係り結びの消失

係り結びは上代日本語から観察される現象である。大野（1993）の分析では、係り結びの消失は鎌倉時代初期に始まった終止形と連体形の区別の喪失に起因する。南北朝時代を経て室町時代になると古い終止形は使われなくなり、連体形が終止法と連体法を全く兼ねて表すようになり、連体形終止であることを標識としていた係り結びの効果は失われ、その用法は消滅していったという。

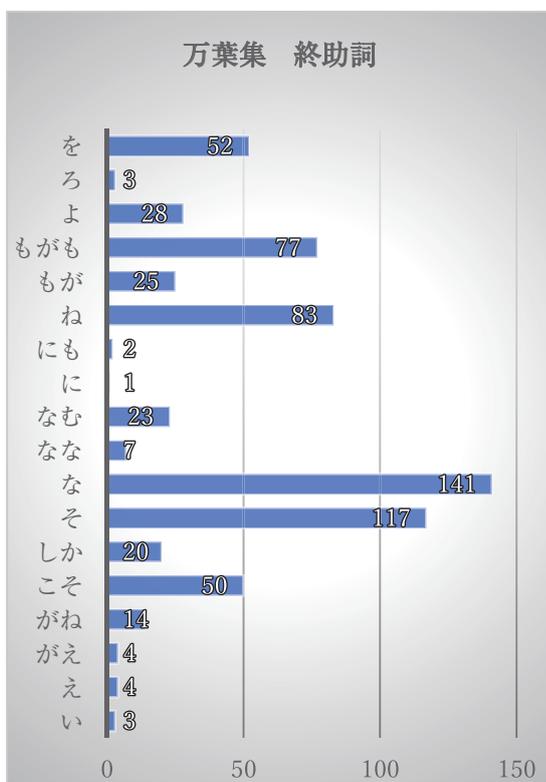
大野（1993）の分析では、係り結びの消失は連体形終止法への移行が原因であるが、この消失は連体形終止法の移行ではなく、他の要因によるものであると考えられる。前述のように、英語は通時的に動詞移動が消失して行った言語である。動詞移動は Force に指定された [+attract] の素性が Fin に素性継承し、それによって動詞が Fin に牽引されることで生じるのであるが、その牽引力が時の経過とともに弱化してしまったため、最初は Fin まで移動していたが、次に T まで、最後は移動なしと循環的に動詞移動が消失していった。日本語は英語と比較すると異なる点が多くあるが、一見無関係に見えるこうした動詞移動の消失が実は係り結びの消失と大いに関連しているように思われる。そこで、日本語の通時的動詞移動とその消失について、それと関連する終助詞の発達と係り結びの関連を比較検討しながら考察していくことにする。

前述のように、現代日本語は終助詞の種類が豊かであり、それによってフォースや心態の表現を表すことが可能である。しかし、上代日本語では終助詞の種類は決して多くはなかった。国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』をコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて係助詞と終助詞の種類と出現数を抽出したが、その結果は以下の通りである。

(92)



(93)



上のグラフから分かるように、奈良時代の係り結びの種類は7種類で、終助詞の種類は18種類である。係助詞「や」は係助詞としての働きだけでなく、文尾に現れて、用言の終止形、命令形、体言に付き、疑問、反語、詠嘆などの意を表す終助詞としても使用されている。

(94) a. 疑問

道の辺の草深百合の花笑みに笑まししからに妻
と言べしや (万葉集, 作者未詳)

b. 反語

越の海の信濃の浜をゆき暮らし長き春日も忘れ
て思へや (万葉集, 大伴家持)

c. 自問

いにしへの人に我あれやささなみの古き都を見
れば悲しき (万葉集, 高市黒人)

係助詞「も」もまた活用形の終止形に付き、詠嘆を表す終助詞として機能する。

(95) 詠嘆

夕されば小倉の山に鳴く鹿の今夜は鳴かず寝ねに
けらしも

(万葉集, 舒明天皇)

係助詞「は」は文尾に生起して何らかのフォースや心態の表現を具現化するという例は万葉集には観察されなかった。「はも」、「はや」、「やは」、「かは」のように「は」は他の助詞と結合して文末に置かれると詠嘆の意を表したが、これは平安時代に入ってからのことである。

係助詞「なむ」は万葉集には一例あるが、同じ形の「なむ」が終助詞として存在する。これは助詞「な」に助詞「も」が添加され古くは「なも」であったが、転じて「まむ」になっている。これは活用形の未然形に付き、「～してほしい」という希望を表す。

(96) 三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふ

べしや (万葉集, 額田王)

「ぞ」に関しては係助詞としての例はあるが、同じ語彙素で終助詞として機能するものは観察されない。

係助詞「こそ」もまた連用形に付いて、文尾で使用されると希望を表す終助詞としての機能を持つ。

(97) わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜さやけ

かりこそ (万葉集, 天智天皇)

係助詞「か」も体言または活用語の連体形を承け、文尾で疑問、反語、詠嘆などを表す終助詞としての機能を持つ。

(98) 言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀にして

(万葉集, 紀女郎)

万葉集で使用されている終助詞は疑問、反語、詠嘆、禁止、希望、願望、決意、強調などの意を表すが、上記のように係助詞が文尾においてそれらと同じ機能を果たしていることが分かる。疑問、反語、詠嘆、禁止、希望、願望、決意、強調などはフォースや心態の表現である。こうしたフォースや心態の表現の具現化として係り結びや終助詞を文尾に置くオプションが生まれる。ただ、その具現化としてどちらか一方というオプションではなく、両者を用いる用法が上代日本語にはある。希求法がその一つである。上代日本語の希求法は助詞「な」、「に」、「ね」や助動詞「こそす」を文尾に置く、或いは「も・・・ぬか」、「も・・・ぬかも」といった「も」と「ぬか(も)」の係りともとれる表現を使用していた。

(99) a. 二上の山に隠れるほととぎす今も鳴かぬか君に聞かせむ (万葉集, 4067)

b. ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山辺に聞もあらぬかも (万葉集, 1077)

上記の例では、「も」という助詞と「ぬか(も)」という

終助詞が連動して希求を表している。この構文で助詞の「も」は強調の働きをもっていると考えられる。これに関しては、フランス語と比較すると分かりよい。

- (100) Je ne parle pas japonais.
I not speak Japanese
“I don't speak Japanese.”

フランス語では、否定文は動詞を ne と pas で挟むことで表される。否定辞の ne は英語の not に相当し、ne だけで否定を表すが、通時的に ne だけでなく pas を付けて表す。元々 pas は「歩み、一歩」という意味で、本来は「一歩も... ない」という強調表現であったが、ne と pas をセットにするのが標準的な否定の表現になっている。これと同じく「も...ぬか」、「も...ぬかも」という希求法は助詞「も」と「ぬか(も)」がペアで希求を強調した形で表していると言えよう。

係り結びは係助詞と文尾に来る活用形の連体形・已然形が連動してフォースや心態の表現を表している。また、係り結びは、フォースや心態の表現を表すのに文尾に終助詞を用いず、活用形の連体形・已然形を置くという特殊な構文をとっている。この特殊性がゆえに文体効果もたらされる。その文体効果を最大限に生かしているのが活用形の連体形・已然形で結ぶという方法である。ただ、それが基底生成で元の位置に留まっているとは思われない点がある。つまり、動詞が基底から Fin へ移動しているという点である。

その動詞の Fin への移動であるが、ドイツ語では、フォースや心態の表現を表す際に動詞を文頭に移動させ、それに伴って副詞が文中に生起する場合がある。そうした副詞として doch が挙げられる。副詞 doch の使い方としては命令・願望の強め、不可能な願望を表し、「それなのに」、「まったく」、「本当に」、「なんといても」といった意味を持つ。

- (101) 命令・願望の強め
a. So höre doch endlich auf!
so hear after all finally at
(さあもういい加減にやめろ)
b. Kommen Sie doch einmal zu mir!
come you after all just to me
(まあ一度拙宅へお出かけくださいよ)

また、不可能な願望を表す場合にも動詞が前置され、doch が文中に生起する。

- (102) 不可能な願望
Wäre es doch wahr!
were it after all truthfully
(それが本当だったらなあ)

副詞 bloß も動詞が文頭に移動した場合文中に生起し、「まあちょっと」といった意味を表す。

- (103) Komm bloß mal hierher!
come merely once here
(まあちょっとここへ来いよ)

副詞 mal も動詞が前置された命令文中で「まあ」、「いっぺん」、「そら」といった強調の意味を表す。

- (104) Komm mal her!
come once here
(ちょっとこっちへ来い)

副詞 ja も動詞が前置された命令文中で「ぜひ」といった意味を表す。

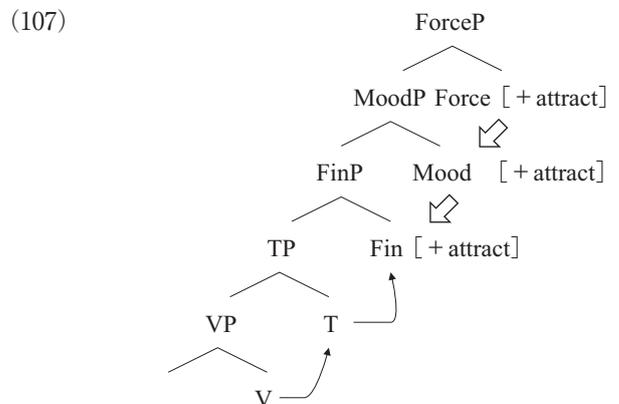
- (105) Schreiben Sie ja recht bald!
write you indeed right now
(ぜひすぐにお手紙下さいよ)

副詞 schon も動詞が前置され要求を表す場合、その強めとして「本当に」、「まったく」、「ぜひ」といった意味を持つ。

- (106) Schreib uns schon!
write us indeed
(私達に手紙を書きなさいよ)

上記のように、ドイツ語ではフォースや心態の表現を表すために動詞を文頭に移動させた場合、doch, bloß, mal, ja, schon といった副詞が文中に生起し、それぞれが持つ意味を強調する。これらの副詞は、係り結びの構文における係助詞と全く同じ機能を果たしている。ドイツ語ではフォースや心態の表現を表すために動詞を文頭に移動させる、つまり Force が活性化し、それが強ければ [+attract] の素性が指定され、それが Mood そして Fin に循環的に継承される。継承された [+attract] は動詞を Fin に牽引する。Doch, bloß, mal, ja, schon といった副詞はそうしたフォースや心態の表現をサポートする形で文中に生起し、動詞と連動してそれぞれの意味を表す。このドイツ語のフォースや心態の表現を表すメカニズムはまさに係り結びのメカニズムと同じである。

ドイツ語のフォースや心態の表現を表すメカニズムが係り結びのメカニズムと同じであるのであれば、日本語においてもフォースや心態の表現を表す場合、動詞が Fin に移動しているということになる。



具体的には係り結びの構文においては、断定、強調、謙退の態度、疑問といったフォース、心態の表現を表す場合、Force が強く活性化し、それに伴って [+attract] の素性が指定され、Mood そして Fin に循環的に継承される。継承

された[+attract]は動詞を Fin に牽引する。その際、動詞が連体形の形になり、文中に生じた「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」といった係助詞が移動した動詞と連動して共に係り結びの効果を生み出す。構成素の強調の場合、Force からの継承によって Fin に指定された[+attract]によって動詞がそこに牽引され、動詞の形態が已然形になる。それと同時に文中に導入された係助詞「こそ」が移動した動詞と連動して共に係り結びの効果を生み出す。

では、なぜ「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」といった係助詞が生起する場合、動詞が終止形ではなく連体形になるのであるか。可能性としては日本語ではフォース、心態の表現が体言と結びつき易いからであると思われる。言語を通して、フォース、心態の表現がそれぞれ個別の形態となって具現することは経験的に分かる。例えば、キクユ語、パラオ語、ホーサ語、ムーア語においては、疑問のフォースが生起した場合、動詞の形態が現実相 (realis) から非現実相 (irrealis) の形態に変化する。

(108) キクユ語

nó-óí ó-γ w-eciiri-a [Ng ó γe a-úγ-írε [áte t_i o-On-írε Kaanake]]
 FP-who SP-T-think-T Ngui SP-say-T that PP-see-T
 Kaanake (irrealis) (irrealis) (irrealis)
 “Who do you think Ngūgī said saw Kaanake?”

(109) パラオ語

ng-nerga_i a le-silse-ii (*silseb-ii)_i _i a
 se?el-il?
 CL-what irrealis-PF-burn-3SG realis
 friend-3SG
 “What did his friend burn?”

(110) ホーサ語

Ban sa ban waa_i t_i yakee tsammaanii wai
 NEG1s know NEG who 3sm-IR-cont think that
 yaa /*ya sayi mee
 3sm compl-R/IR-compl buy what
 “I don’t know who thinks he bought what.”

(111) ムーア語

a Pok yà-a /*yà ànda zaame ?
 Poko see /see-IR who yesterday
 “Who did Poko see yesterday?”

(Haik (1990: 348-352))

ところがチャモロ語では疑問のフォースを表す場合、動詞が名詞化され、動詞に所有格を表す接辞が付加する。

(112) チャモロ語

a. Ha-fa’gsai si Juan i kareta
 E3s-wash Juan the car
 “Juan washed the car.”
 b. Hayi f-um-a’gasi i kareta
 Who WH[nom]wash the car
 “Who washed the car?”

(Dukes (1993: 179))

上記のチャモロ語の例で疑問文となった例では、動詞が名詞化され、それに所有格を導入する接辞 um が付加している。この例は疑問のフォースが名詞化つまり体言と結びつくことを示唆している。

さらに通言語的調査を行うとフォース、心態の表現が体言と結びついている例が多く見られる。ドイツ語では事実を確認して不満・怒りといった心態の表現を表す場合、文頭に補文標識の daß が導入される。

(113) Daß du mir doch nie glauben willst!

that you me after all not believe will

(君が私のことを信用する気になれないなんていやはやまったく)

また、祈願文においても文頭に補文標識の daß が導入される。

(114) Daß er nur rechtzeitig kommt!

that he only in time comes

(彼が時間通りに来てくれますように)

ヨーロッパの言語では補文標識は指示代名詞或いは関係代名詞から派生して現在に至っている。指示代名詞或いは関係代名詞は名詞表現であるため、フォースや心態の表現が体言と結びつき易いということが分かる。従って、フォースや心態の表現が補文標識と関わることは不思議なことではない。

さらに、言語を通して感嘆、命令を表す文では文頭にその言語の補文標識を導入することが多い。

(115) Exclamative clauses

a. At du junne gøe det! (Danish)

That you could do it

“How could you do such a thing!”

b. Daß mir das nicht früher aufgefallen ist! (German)

That me that no earlier struck is

“To think that it didn’t strike me earlier!”

c. Qu’elle est bavarde! (French)

That she is talkative

“What a chatterbox she is!”

d. Að María skuli elska Jón (Icelandic)

That Mary shall-SUB love John [SUB = subjunctive]

“That Mary should love John!”

(Radford (1988: 297))

(116) Imperative clauses

a. Qu’il aille se faire foutre! (French)

That he go-SUB himself make do

“Let him go and get stuffed.”

b. Daß du ja die Füße vom Tisch läßt! (German)

That you yes the feet off table keep

“Keep your feet off the table!”

c. Que vengán todos! (Spanish)

That come all
“Let them all come.”

また、平叙文においてもそれが断定フォース (declarative force) を表す文では補文標識が導入される言語がある。

(117) Declarative clauses

a. ?inna Iwalada qad taraka Ibayta (Arabic)
That the-boy did leave the-house
“The boy left the house.”

b. Que mi gato se enratonó (Spanish)
That my cat itself enmoused
“My cat got sick from eating too many mice.”

(Radford (1988: 298))

疑問文においても、疑問のフォースとの結びつきからか補文標識を導入する言語がある。

(118) Bavarian

Warum da -ma (mir) noch Minga fahr-n
why that-(1PL) we to Munich drive-(1/3PL)
“...why we drive to Munich”

(Bayer (1984: 251))

(119) a. Quoi que tu as fait? (Quebec French)

what that you have done

b. Chi che t'è vest? (Italian Romagnolo dialect)
who that you have seen

(Haegeman (1991: 111))

c. Cén bhean a phósfadh sé? (Irish)

Which woman that would-marry he

“Which woman would he marry?”

(Radford (1988: 501))

上記の言語は wh 疑問文で、予測としては wh 句の後に(助)動詞が導入されるはずであるが、補文標識が導入されている。補文標識は Fin に導入されるということは広く認められていることであるので、上記の wh 疑問文では疑問のフォースが活性化し、[+attract]の素性が Force から Fin に継承され、本来なら(助)動詞がそこに牽引されるはずであるが、その代わりに名詞的性質を持つ補文標識が併合(merge)によって導入されていることになる。

ベルファスト英語では、間接疑問文において主節現象として主語・助動詞倒置が生起し、補文の Fin に助動詞が移動してくる場合もあれば、Fin に補文標識が導入される場合もある。

(120) Belfast English

a. I wondered where were they going.

b. I wonder which dish that they picked.

(Henry (1995))

ベルファスト英語は、間接疑問文ではこのように疑問のフォースが活性化する場合、Fin に助動詞を移動させるか、本来名詞的性質を持つ補文標識をマージするかのオプションがある言語であると言える。

こうした事実は、フォースや心態の表現が体言と結びつ

き易いということを強く示唆するものである。日本語は上記の言語と同じく、フォースや心態の表現が体言と結びつき易い。

(121) a. あのパーティーの楽しかったこと。(感嘆)
b. 明日までにこの宿題をやってくること。(命令)
c. 何としたことか。(感嘆・失望)

d. 残念なことに突然コンピューターのデータが消えてしまった。(悔恨)

e. 顔色が悪いようだから、今日は早く帰って寝ることだ。(忠告)

f. 娘に先立たれるなんてなんと悲しいことでしょう。(感情)

(122) a. 学生はもっと勉強するものだ。(訓戒・忠告)

b. 海外旅行はすばらしいものだ。(感心・感慨の気持ち)

c. 小学生のころはよくあの川に魚釣りに行ったものだ。(回顧・懐かしさ)

d. 誰が行くものか。(強い意志)

e. 私に逆らうものではない。(忠告)

f. あいつの言っていることなんか本当なものか。(否定)

(123) a. 誰がそこに行ったの。

b. 誰がそこに行ったのですか。

c. 誰がそこに行ったのだろうか。

d. 太郎がそこに行ったの。

上記の(123)の「の」は前述のように Fin に生起する。(123a, b, c)は疑問のフォースと結びつき、(d)は断定のフォースと結びついている。「の」は格助詞として体言や体言に準ずる語に付くが、終助詞として体言や文に付き、断定、感動、念押し、同意などの意を表す助詞としての働きを持っていた。

(124) はて、とんだ物が目にはいったの (浮世風呂)

前述のように、ドイツ語ではフォースや心態の表現を表す場合、Fin に補文標識の daß を生起させ、それと連動した副詞を導入する場合がある。

(125) Daß du mir doch nie glauben willst! (不満・怒り)

この例では、強意を表す doch が daß と共に導入されている。補文標識 daß は名詞的性質を持っており、こうした例は日本語の係助詞+連体形終止と平行的である。

日本語にはこのように、フォースや心態の表現が体言と結びつき易い性質がある。係り結びも断定、強調、謙退の態度、疑問といったフォース、心態の表現を表すため、それらが活性化し、[+attract]の素性が Force から Mood、Fin に継承されて動詞が Fin に牽引されると、Force、Mood の影響で動詞が連体形になり、連体終止となる。それと同時に、強い断定のフォースを表す場合は「ぞ」が、確信や伝聞・伝承を謙遜して表明するフォースと心態の表現が入り混じった場合は「なむ」が、推測・疑問を表明す

る場合は「や」が、不明、疑問を表す場合は「か」が移動した動詞と連動し係り結びが完成する。

ここでは宗正（2018, 2019a）で述べたように、動詞移動は狭域統語論ではなく、そこから転送され、PFに至るまでの分散形態論で生じると考える。この分散形態論では感覚運動インターフェイスに行く前に統語構成物の形態が決定されるのであるが、その形態の決定の際には移動操作も行われる（Halle and Marantz（1993）等参照）。上記のように、係助詞「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の係り結びの形成には動詞が Fin に牽引され Fin に移動した後に、動詞が連体形に変化する。このことはまさに本稿で主張する統語的、形態的言語差異は狭域統語論ではなく、統語構成物が転送された後に決定されるということと有機的に結びついていく。

係助詞「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」が生起した場合、連体形終止になるが、係助詞「こそ」が生起した場合なぜ已然形で終止したのであろうか。ただ、次の例のように必ず「こそ」と呼応して已然形で終止するということはなく、係り結びの不整合が生じることもあったが、大方は「こそ-已然形」の形式である。

(126) ゆづり葉の茎はいと赤くきらきらしく見えたる
こそあやしけれどをかし（枕草子, 37）

前述のように元々、「こそ」は文末の已然形と呼応して逆接確定条件句を作っていた。上代、中古期では順接・逆接の確定条件は已然形に「ば」、「ど」、「ども」が付加して表されていた。

(127) 逆接確定条件

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ
驚かれぬる（古今和歌集）

上記の例は「已然形+ども」は逆接確定条件を表している。逆接というのは二つの文又は句があるとすると、一方が成り立てば、もう一方は成り立たないというものをあえて結びつける方法をとる。つまり一方は否定される訳である。また、「こそ」は、対照的に他のものを排除して、それだけが該当するという捉え方を表す働きを持つ。逆接は否定を内包しており、そのため已然形と親和性がある。「こそ」は他方を排除する、つまり他方を否定するという性質を内包する。已然形と「こそ」の両者に共通するのはこの「否定」という概念である。この共通性が故に係助詞「こそ」は已然形と呼応したのであろう。より正確には、否定は本稿で繰り返しているように心態の表現であるため Mood と関わる。「こそ」の係り結びは元々「こそ」が承ける語を否定的に強調することであるので、強調の Force が活性化し、[+attract]の素性が Force から Mood, Fin に継承されて動詞が Fin に牽引されると、Force, Mood の影響、特にこの場合 Mood に内包される否定の概念の影響で動詞が已然形になり、已然形終止となる。それと同時に、導入された強調を表す「こそ」と已然形動詞との連動で係り結びが完成する。

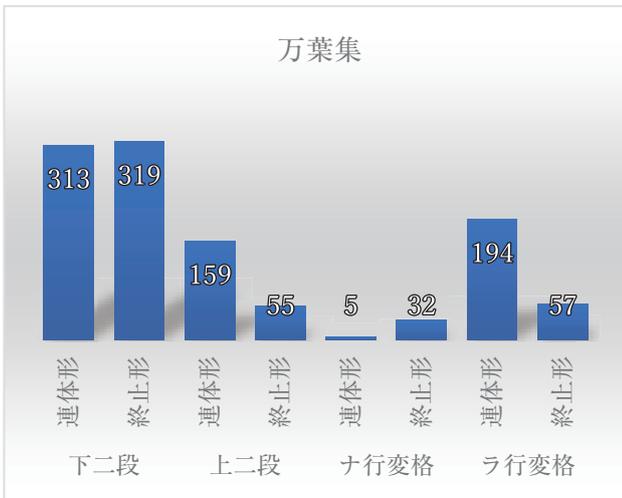
では、なぜ係り結びは消失してしまったのか。大野（1993）によると、前述のようにその消失は鎌倉時代初期から見られる終止形と連体形の区別の消失と関連するということであった。室町時代になって古い終止形は使われなくなり、連体形が終止法と連体法を全く兼ねて表すようになったため、連体形終止であることを標識としていた「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の係り結びの効果は失われ、その用法は消滅していったという。しかし、連体形終止の頻度の高さは既に上代日本語から観察される。下記のように古語の動詞の活用は四段活用、下一段活用、下二段活用、上一段活用、上二段活用、カ行変格活用、サ行変格活用、ナ行変格活用、ラ行変格活用のうち下二段活用、上二段活用、カ行変格活用、サ行変格活用、ナ行変格活用、ラ行変格活用が終止形と連体形がそれぞれ異なる形をしている。

(128) 古語の動詞活用例

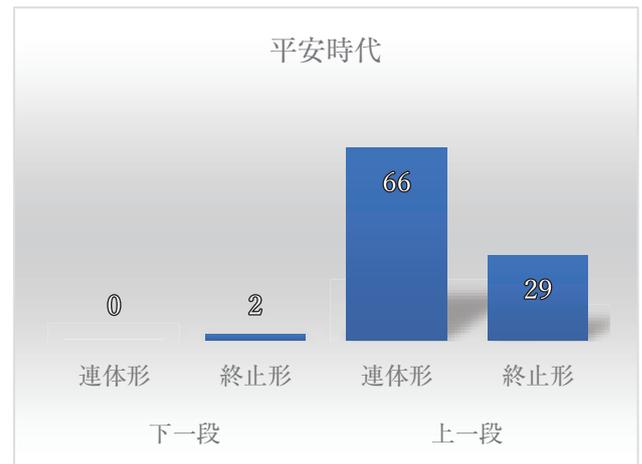
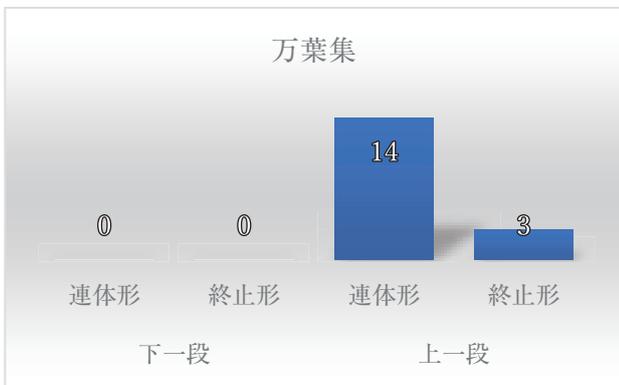
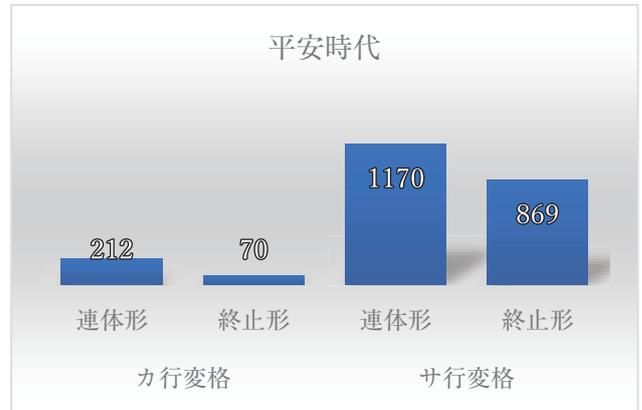
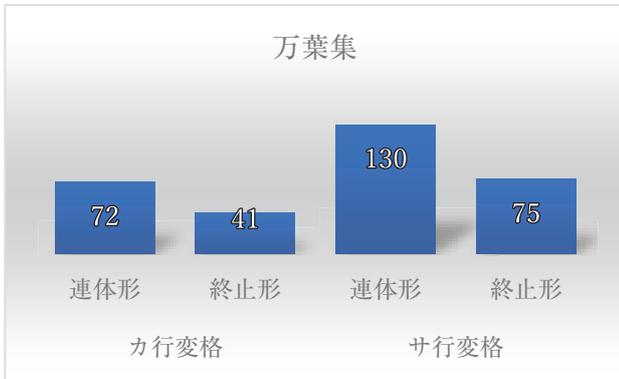
活用の種類	例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	飽く	飽	か	き	く	く	け	け
下一段活用	蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段活用	受く	受	け	け	く	くる	くれ	けよ
上一段活用	着る	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上二段活用	起く	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
カ行変格活用	来	(来)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ行変格活用	為	(為)	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ行変格活用	死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行変格活用	有り	有	ら	り	り	る	れ	れ

ところが国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を検索アプリケーション「中納言」を用いて奈良時代から江戸時代の動詞の終止形、連体形の出現頻度を統計調査してみると、明らかに連体形の出現頻度が高いことが分かる。

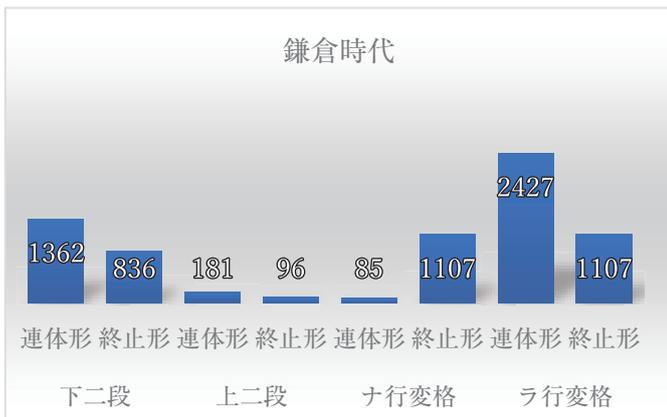
(129)



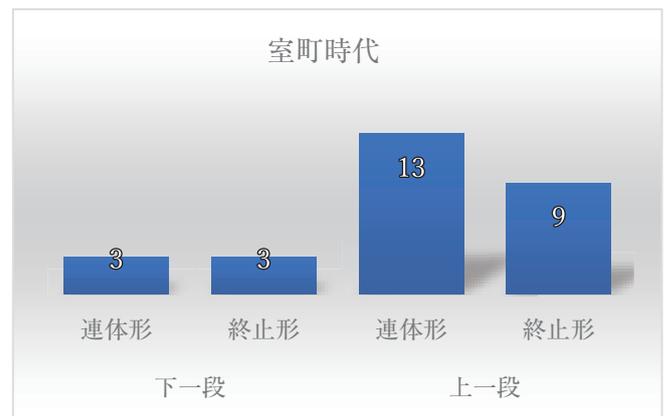
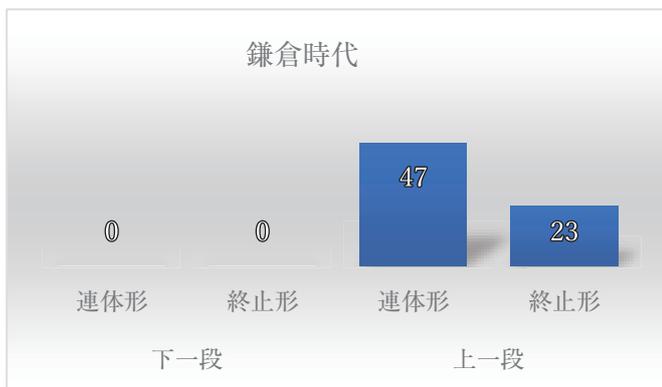
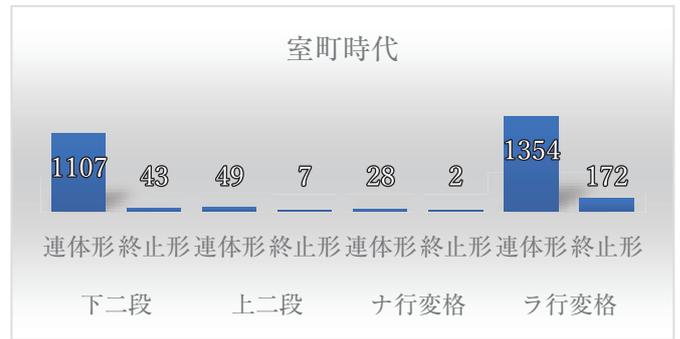
(130)



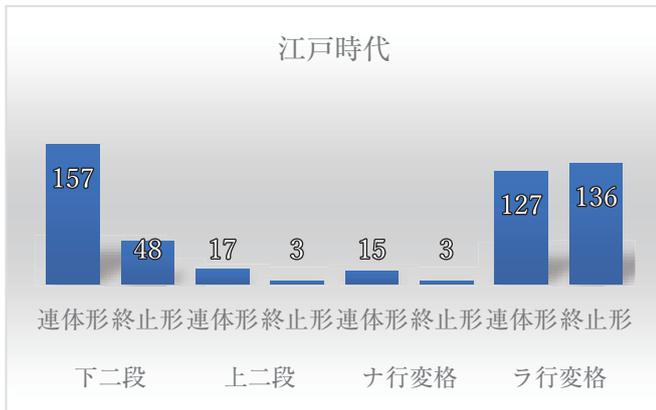
(131)



(132)



(133)



以上のように文が連体形終止となる頻度が高いという事実は、文尾で表されるフォース、心態の表現が体言と結びつき易いことを示唆している。それが故に動詞が連体形として終止するのである。しかし、連体形と終止形の区別は江戸時代までである。大野 (1993) が言うように連体形と終止形の区別の消失が係り結びの消失に繋がるなら、江戸時代まで係り結びは残存しているはずであるが、事実は予測に反する。

では、どうして係り結びは消失してしまったのであろうか。それは動詞が Fin にまで牽引されなくなったからである。日本語はフォースや心態の表現が体言と結びつき易い性質があることは既に見た。係り結びは断定、強調、謙退の態度、疑問といったフォース、心態の表現を表すため、それらが強く活性化し、 [+attract] の素性が Force から Mood、そして Fin に継承されて動詞が Fin に牽引される

と、Force、Mood の影響で動詞が連体形或いは已然形になる。その動詞と係助詞との連動で係り結びが完成するが、この動詞の移動の消失が係り結びの消失に繋がる。

移動よりも併合 (merge over move) といった経済性の原理が言語現象を支配するが、この経済性の原理により動詞の移動は制限される。移動よりも併合が選ばれるのであれば、動詞を Fin に移動させて係り結びを形成するよりも、終助詞を Fin、Mood、Force に導入、つまり併合して表した方が派生上より経済的である。上代日本語ではフォース、心態の表現は終助詞を導入することで表されたのであろう。その終助詞によらない方法、つまり動詞を Fin に移動させてその代わりをする。その副作用として強意表現である「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」、「こそ」といった係助詞を文中に導入して動詞と連動させる。この係助詞は恐らくそれぞれ意味を持つ焦点マーカー (focus marker) であろう。こうした構文は前述のようにまさにドイツ語と同じである。しかし、係り結びの構文において係助詞は時が経つにつれ次の例のように導入されなくなる。

- (134) a. ひとりして物を思へば秋の田の稲葉のそよという人のなき (古今和歌集, 584)
 b. 雀の子を犬君が逃がしつる (源氏物語, 若紫)
 c. わが宿に花を残さず移し植ゑて鹿のね聞かぬ野辺となしつる (後拾遺和歌集, 332)

こうした例では、係助詞は導入されていないが、動詞は Fin に移動し、連体形で終止させているため喚体的効果が現れている。最終的に経済性の原理により動詞が Fin に移動しなくなると、最後の手段として終助詞を導入することでフォース、心態の表現を表すようになる。

- (135) フォース・心態の表現に関する形態の変遷
 a. ... 終助詞
 ⇒ b. X 係助詞 ... 連体形・已然形
 ⇒ c. X ... 連体形・已然形
 ⇒ d. ... 終助詞

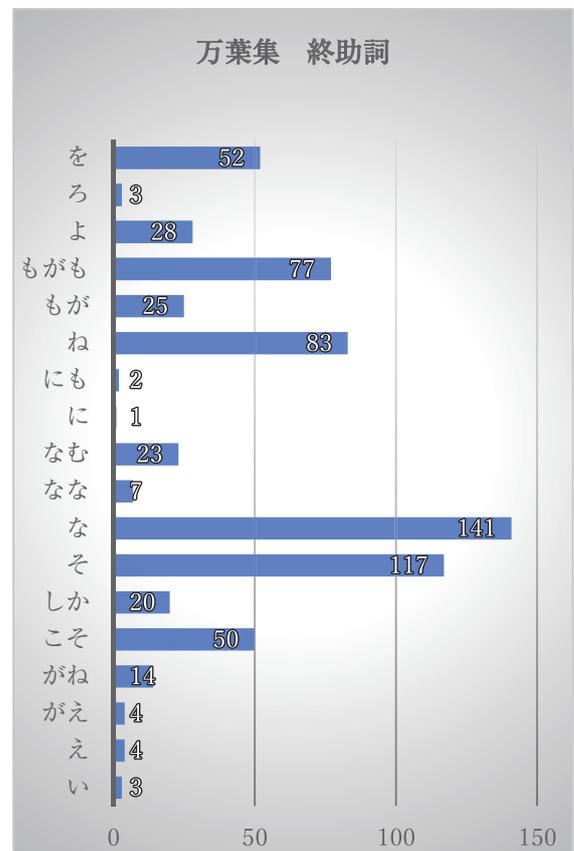
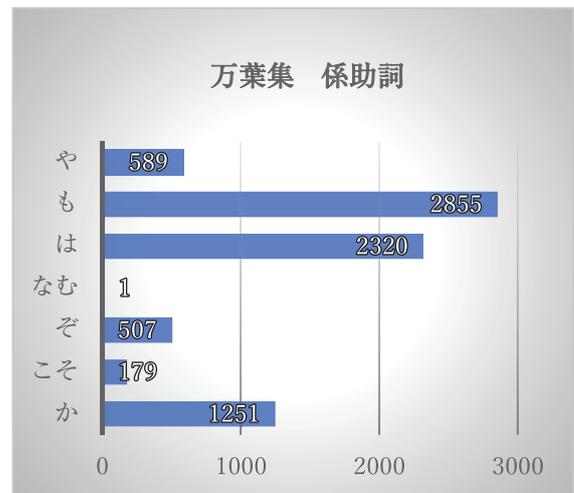
この変遷はイエスベルセン・サイクルを想起させる。イエスベルセンは諸言語の否定表現が一定の傾向で変化することを発見している。その否定表現の変化の各段階は以下の通りである。

- (136) ① 否定文は動詞に先行する否定標識で表される。
 ② 否定標識が音声的に弱くなり、強調の副詞が付け加えられる。
 ③ 強調の副詞が義務化して否定副詞となり、否定は2語で表される。
 ④ 否定は否定副詞で表され、元々の否定標識は任意になる。
 ⑤ 否定は否定副詞だけで表される。
 ⑥ 否定副詞が、動詞に先行する否定標識としても使われる。
 ⑦ ①に戻る。

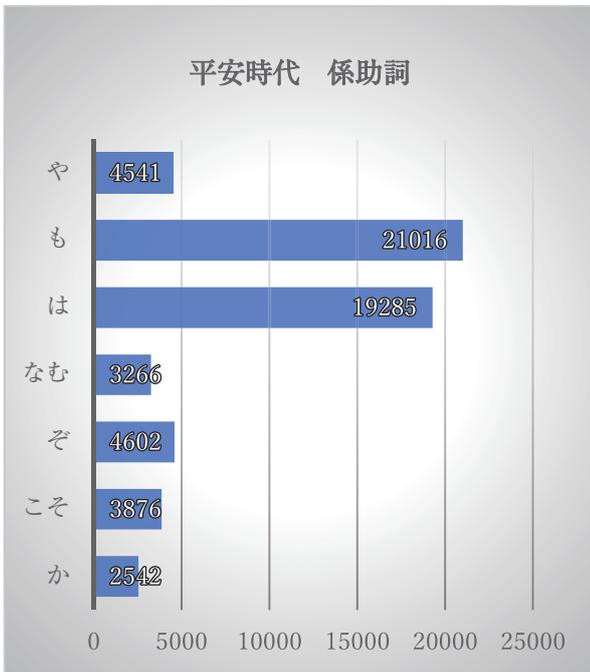
ラテン語は一周して①の段階に戻ってしまったが、前に見たように現代フランス語では④の段階である。ただ、口語のフランス語では⑤の段階に入りかかっており、否定標識が任意になっている。フランス語の変異形であるケベックのフランス語は⑤の段階に進んでいる。このイエスベルセン・サイクルと係り結びの消失の関連については、今後の課題として詳細には言及しないが、言語のメカニズムには何らかの共通した通時的変遷があることは確かである。

係り結びは室町時代に消失したとされるが、それは Fin への動詞の移動が消失したためである。再度国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を検索アプリケーション「中納言」を用いて上代日本語から係助詞と終助詞の出現頻度と種類に関する統計をとってみると以下のような結果が導き出された。

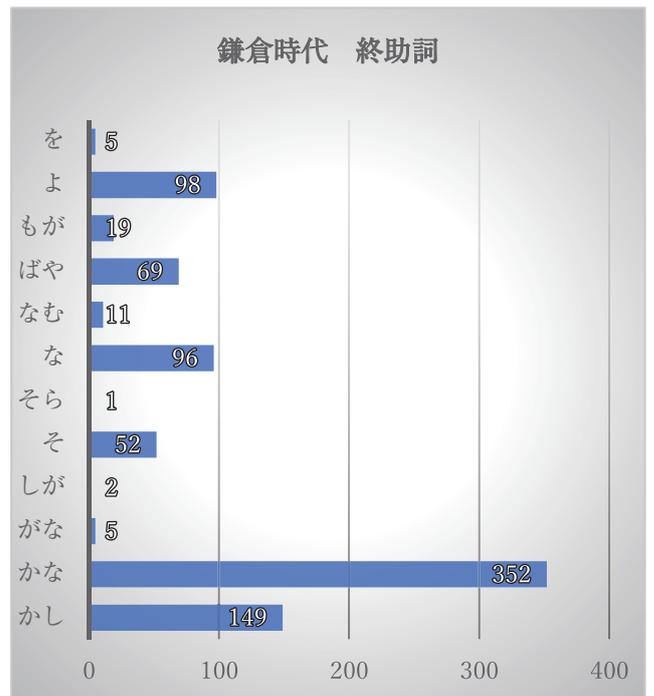
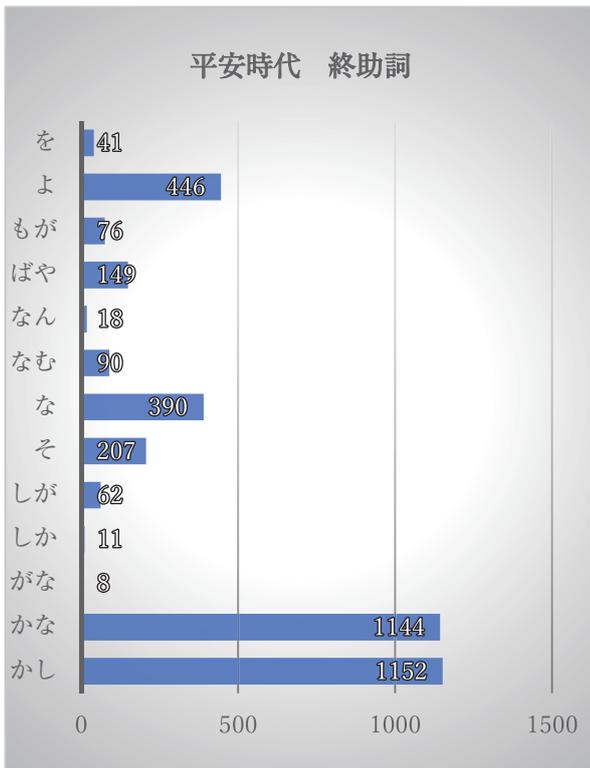
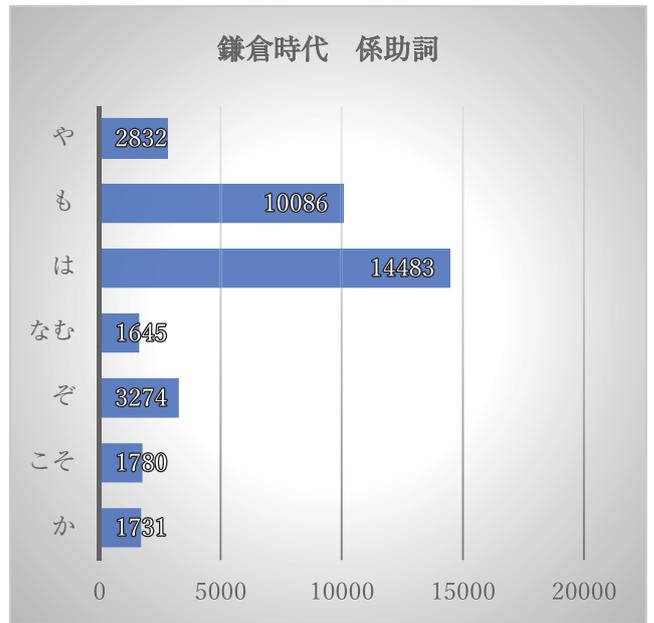
(137)



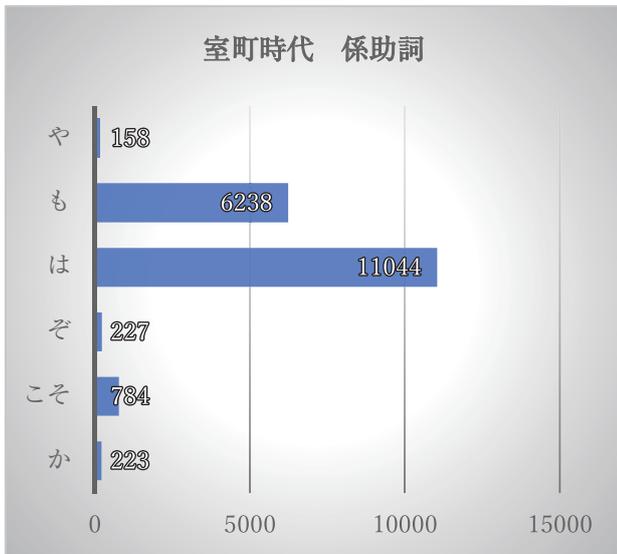
(138)



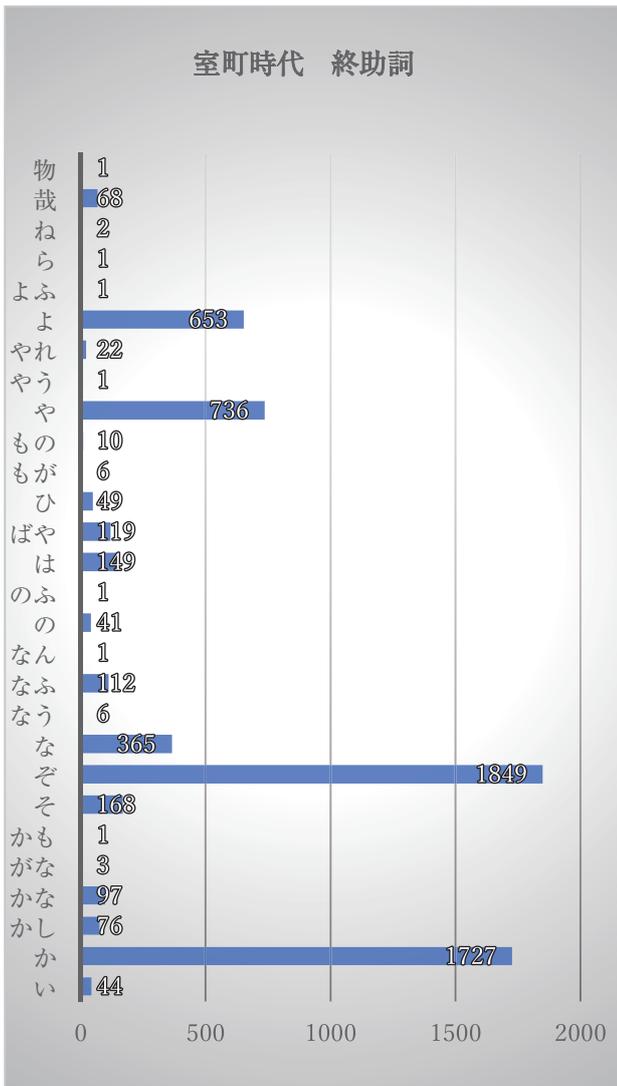
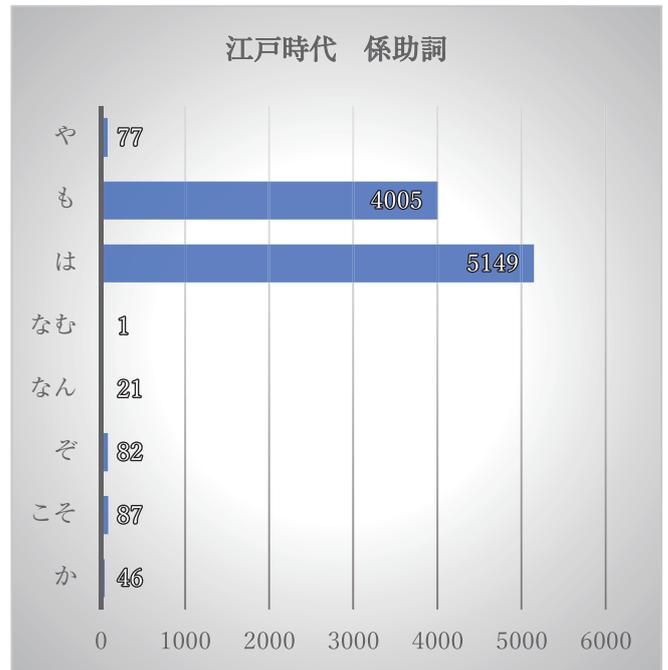
(139)

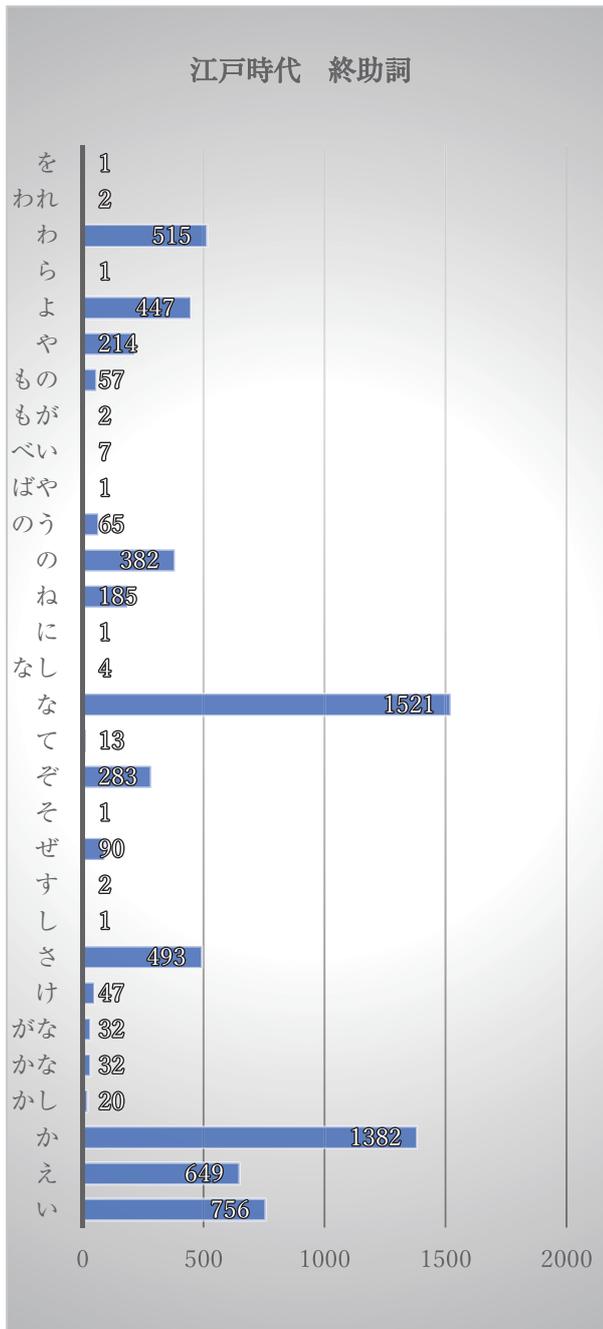


(140)



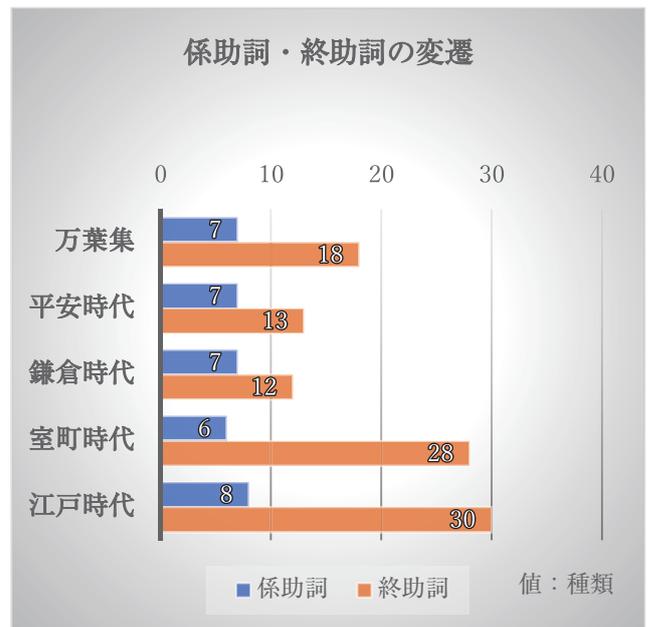
(141)





上記の統計を纏めると以下のようになる。

(142)



表から分かるように、係助詞の数は上代日本語から江戸時代まで数はほとんど変わらないが、終助詞は種類が上代日本語では18あったが、それが室町時代に28に増加している。係り結びが室町時代に消失したのは動詞の移動の消失によりフォース、心態の表現を終助詞に依存することになった結果である (cf. 北原 (1984), Hendriks (1998), 野村 (2005) 等)。そしてその依存度が高いために文を終助詞で終止する頻度が増し、結果的に終助詞の種類が増加したのである。

英語は動詞の移動が循環的に消失した言語である。日本語も同様に動詞移動が消失することで係り結びが消失し、フォース、心態の表現を終助詞に託す傾向を益々強め、今現在では相当数の終助詞を擁する言語となっている。

9. 他言語の係り結び

係り結び又はそれに類似する文法現象は日本語に限られず他の言語にも観察される。よく言われることであるが、琉球諸語の中で沖縄首里方言ではこの係り結びが行われる。

(143) 琉球諸語 沖縄首里方言

- a. sjumuçi junuN. (本を読む。)
- b. sjumuçiga junura? (本を読むのだろうか。)
- c. waagadu junuru. (私が読むのだ。)

(衣畑 (2016: 19-20))

沖縄首里方言では、上記のように通常の終止が junuN (読む) であるが、助詞 ga があれば junura と連体形に、助詞 du があれば同じく junuru と連体形で終わる。助詞 ga は疑問文中に生起し、疑問のフォースと結びついて疑問文を形成するが、その際動詞が連体形になっている。これはまさに日本語の古語に見られる係り結びと同じメカニズムであ

る。つまり、疑問といったフォースを表す場合、それが活性化し、その強さ故に [+ attract] の素性が Force から Mood, Fin に循環継承して動詞が Fin に牽引される。そして Force, Mood の影響で動詞が連体形になり、連体終止となる。それと同時に、文中に導入された助詞 ga と動詞との連動で係り結びが完成する。

沖縄首里方言は昔の係り結びのメカニズムを保持した言語であるといえるが、宮古西里方言には明確な係り結びがないという。

- (144) a. kjuu = ja irau = nkai iki ks-tai.
今日 = Top 伊良部 = All 行く 来る -Past
「今日は伊良部に行ってきた。」
- b. kjuu = ja ndza = nkai = ga iki ks-tai.
今日 = Top どこ = All = Foc 行く 来る -Past
「今日はどこに行ってきた?」
- c. kjuu = ja irau = nkai = du iki ks-tai.
今日 = Top 伊良部 = All = Foc 行く 来る -Past
「今日は伊良部に行ってきた。」

(衣畑 (2016 : 20))

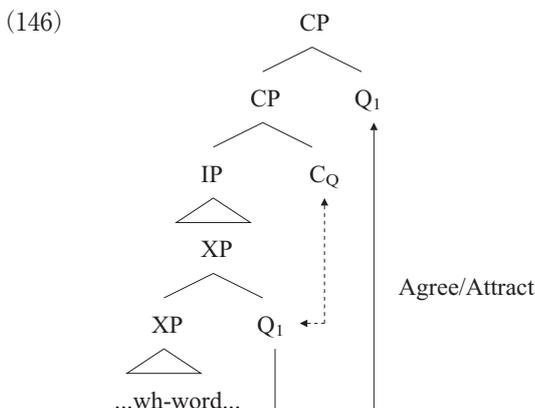
上記のように宮古西里方言では、助詞 ga や du が導入されても文尾にくる動詞が連体形にならない。これは、日本語の古語や沖縄首里方言とは異なり、動詞が Fin に移動するのは同じであるが、Force や Mood が体言と結びつかなかったためであろう。

シンハラ語も日本語の古語や沖縄首里方言と類似した現象を示す。

- (145) a. gunāpaala sinduvak kivva.
Gunapala a.song sang
“Gunapala sang a song.”
- b. Siri mokak də keruwe?
Siri what Q did-E
“What did Siri do?”

(Hagstrom (1998 : 20))

シンハラ語では、wh 疑問文において疑問詞に小辞 də が付加し、文尾にくる動詞に e という形態素が付加する。Hagstrom (1998) は動詞に付加する e は wh 疑問文のスコープ・マーカであるとして分析している。



Hagstrom (1998) によると、C は解釈不可能な Q 素性を持っており、C は解釈可能な Q 素性を持つ wh 句に付加した疑問小辞 də の探索子となり、də と Agree の関係を形成する。その一致関係によって C の解釈不可能な Q 素性が削除され、その後疑問小辞 də は C に移動する。しかし、シンハラ語はこの小辞の移動は LF で非顕在的に移動するという。また、Hagstrom (1998) は日本語においても同じメカニズムが働くと分析している。日本語では現代日本語では疑問小辞「か」は wh 疑問文では文尾に生じる。

- (147) 昨日何を買いましたか。

係り結びが消失する前は「か」は wh 句に付加していたという前提で、wh 句に付加した「か」は現代日本語では顕在統語論 (overt syntax) で C に移動するという。シンハラ語と現代日本語の差異はこうした疑問小辞の顕在的移動か非顕在的移動かに依拠するという。しかし、ここでいう疑問小辞「か」は古語では係助詞であるが、「か」は古くより終助詞として文尾に生起することができ、疑問や反語のフォースを表すことができた。

- (148) a. 苦しくも降り来る雨か三輪の崎狭野の渡りに
家もあらなくに (万葉集)
- b. 言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀
にして (万葉集)
- c. 吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蝉鳴
きて秋は来にけり (金槐和歌集, 源実朝)

従って、Hagstrom (1998) が分析するように「か」は元々 wh 句に付加していたのではなく、文尾、ここでの分析では Force に生起していたのが係助詞としての働きを持つようになり、係り結びを形成する際に wh 句に付加し始めたものと考えられる。また、シンハラ語の疑問文で文尾に導入され、動詞に付加する e という形態素はスコープ・マーカともとれるが、疑問のフォースと結びついた形態素であろう。それが疑問小辞の də と結びついて wh 疑問文を形成していると考えられ、まさに疑問のフォースと結びついた係り結びの現象と全く同じであると言えよう。³

こうした言語では、日本語の古語と同じく、フォースや心態の表現との結びつきで動詞の Fin への移動があるものと考えられる。しかし、沖縄首里方言では動詞がフォースや心態の表現との結びつきで連体形に変化するが、宮古西里方言では形態変化はない。シンハラ語では係り結びと同じメカニズムが働き、wh 句に疑問小辞が付き、移動した動詞に疑問のフォースを表す形態素が付加する。これらの言語に共通することは動詞の Fin への移動であろう。この移動はフォースや心態の表現の具現化のためのものである。もしこの動詞移動が消失すれば、係り結びが消失した後のように、現代日本語と同じく、終助詞に相当するものを文尾に導入することによってフォースや心態の表現を具現化することになるであろう。

10. 結語

本稿では改定カートグラフィーに基づき、先ず V1, V2, V-to-T 移動及びそれらの通時的消失について考察した。言語を通してフォースが生じた場合、その活性化が強いと Force に [+attract] の素性が指定され、それが Fin に継承されることで動詞が Fin に牽引される。V1 はその一例である。Wh 疑問文では wh 句が Q の活性化に伴いその指定部に移動し、疑問のフォースが強いと Force から [+attract] の素性が Fin に素性継承され、(助) 動詞が Fin に牽引される。否定辞倒置、焦点化、話題化においてもフォースの活性化が強いと [+attract] の素性が Fin に素性継承され、(助) 動詞が Fin に牽引される。これがゲルマン系言語に見られる V2 のメカニズムである。英語においては、V2 は古英語期より観察されたが、それは 15 世紀の後半に、話題化、焦点化において消失する。これは当該の現象がフォースと結びつかなくなり、Fin への動詞移動が消失した帰結である。以後、平叙文においてはフォースの活性化に伴う Force から Fin へ継承された [+attract] の素性の牽引力が T までしか及ばなくなり、動詞移動が T までとなる。その後、T までも動詞の牽引力が及ばなくなり、それによって 16 世紀の後半に V-to-T 移動が消失し現在に至る。従来の一貫の豊かさに依拠する分析はこうした循環的動詞移動の現象に対して難点があった。しかし、ここでのフォースに基づいた分析は循環的動詞移動の現象だけでなく、他の言語の循環的動詞移動の通時的変遷に対しても直接的且つ統一的説明が可能になる。

また、本稿では心態の表現に関わる投射 MoodP が ForceP と FinP の間にあることを経験的な事実に基づき主張した。MoodP では心態の表現に関する空範疇がその指主要部に生起する。疑問文の場合であれば、英語では MoodP の主要部にどちらか分からないという uncertain の意味を表す空範疇が生起する。この空範疇は uncertain という否定的な意味を持つため、文内の否定極性表現を c 統御することでそれを認可する。条件文においても、文内の MoodP の主要部に uncertain の意味を持つ範疇が生起する。条件文の中には否定極性表現が生起可能であるが、これは MoodP の主要部に否定的意味を持つ範疇が存在するからである。形の上では肯定文であるが否定的な意味を持つ述部の補文に否定極性表現が出てくるが、これは述語の否定的意味が補文の MoodP の主要部に生起する範疇と結びつき、それが否定極性表現を c 統御し認可できるためである。

英語は左周辺部を呈する言語であるが、日本語は主要部後置型の言語であるため、右周辺部を呈する。推量、可能性、反語、感嘆文における心態の表現とフォース標示の小辞の位置の相対性から、MoodP は英語と同じく ForceP と FinP の間、正確には FinP の上に生じる。もしフォースが生じた場合、その活性化が強いと Force に [+attract] の素

性が指定され、それが Fin に継承されることで動詞が Fin に牽引されるが、その際、Force, Mood, Fin と循環継承される。この素性により日本語は英語と同じく動詞が Fin に移動していくが、それが通時的に消失していく。上代日本語には係り結びが存在したが、多くは室町時代までに消失した。係り結びは断定、強調、謙退の態度、疑問といったフォース、心態の表現の具現である。係り結びではフォースが活性化しそれが強いため、Force から [+attract] の素性が Mood を経て Fin に素性継承され、動詞が Fin に牽引される。係助詞「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」が文中にある場合、動詞は Fin に移動して連体形となり連体終止となる。「こそ」の場合は動詞が已然形に変化し、係助詞と動詞が連動して係り結びを形成する。しかし、動詞の移動はコストがかかるため、時間と共に経済性の原理により Fin までしか移動しなくなる。この経済性の原理により Fin への動詞の移動は室町時代に消失する。動詞の移動がなくなるとフォースや心態の表現を表すために、終助詞を Force, Mood, Fin に導入することになる。室町時代には上代日本語と比較すると、フォースや心態の表現を表す終助詞の種類が 1.5 倍増えている。英語は循環的に Fin への動詞の移動が消失した言語であるが、日本語も同じく動詞の Fin への移動が消失した言語である。係り結びの消失は、この Fin への動詞移動の消失と密接に関連しているのである。

注

¹ 益岡 (1991) は日本語の心態の表現をモダリティとしてとらえ、それには取り立てのモダリティ、みとめ方のモダリティ、テンスのモダリティ、説明のモダリティ、価値判断のモダリティ、真偽判断のモダリティ、表現類型のモダリティ、ていねいさのモダリティ、伝達態度のモダリティがあることを主張している。そして、それらのモダリティは以下のような階層性を示すという (こうした階層性に関しては他に南 (1974)、奥津 (1976)、北原 (1981)、寺村 (1982)、澤田 (1983)、仁田 (1985) 等参照)。

- (i) 伝達態度のモダリティ / ていねいさのモダリティ / 表現類型のモダリティ >> 価値判断のモダリティ / 真偽判断のモダリティ >> 説明のモダリティ >> みとめ方のモダリティ / テンスのモダリティ >> 取り立てのモダリティ >>

命題

命題の部分は本稿の分析では FinP に相当し、上記のモダリティはそれぞれ階層を成して MoodP を形成することになる。こうした日本語のモダリティの種類と階層性に関しては更なる議論が必要であるが、それに関しては稿を改めることにする。

² 国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』は次の文献で成り立つ。奈良時代：万葉集。平安時代：竹取物語、古

今和歌集, 伊勢物語, 土佐日記, 大和物語, 平中物語, 蜻蛉日記, 落窪物語, 枕草子, 源氏物語, 和泉式部日記, 紫式部日記, 堤中納言物語, 更級日記, 大鏡, 讃岐典侍日記 (会話, 歌詞, 書手紙, 地の文ほか)。鎌倉時代: 今昔物語集, 方丈記, 宇治拾遺物語, 十訓抄, 徒然草, 海道記, 建礼門院右京大夫集, 東関紀行, 十六夜日記, とはずがたり (会話, 歌, 手紙, 引用, 地の文ほか)。室町時代: 虎明本狂言集, 天草版伊曾保物語, 天草版平家物語 (会話, ト書き, 引用, 地の文ほか)。江戸時代: 洒落本大成 (会話, 割書き, 引用, 地の文ほか)。明治・大正時代: 明六雑誌 (1874~1875), 国民之友 (1887~1888), 女学雑誌 (1894~1895), 太陽 (1895, 1909, 1917, 1925), 国民之友 (1887~1888), 女学雑誌 (1894~1895), 女学世界 (1909), 婦人倶楽部 (1925), 高等小学校国語 1 期, 高等小学校 (1~4 年), 小学校国語 1 期 小学校 (1~4 年), 小学校国語 2 期 小学校 (1~6 年), 小学校国語 3 期 小学校 (1~6 年), 小学校国語 4 期 小学校 (1~6 年), 小学校国語 5 期 小学校 (1~6 年), 小学校国語 6 期 小学校 (1~6 年)。

³ トリンギット語 (Tlingit) は wh 疑問文において wh 句に疑問小辞を付加させる言語である。この点で, 日本語の古語, 琉球諸語, シンハラ語と同じ性質を持つ。

- (i) Daa sá i éesh al'oon?
what Q your father he.hunts.it
“What is your father hunting?”

(Cable (2010: 7))

この言語では, 比較的語順が自由であり, SOV, SVO, OVS, OSV, VSO, VOS の語順が可能であるが, 動詞にフォースや心態の表現を表す形態素が付加する, 或いは動詞が体言化するということが観察されない。また, 比較的語順が自由であるため, 動詞が Fin に移動するかどうか確認することはできない。このためこの言語が前述の言語と同じく係り結びと同じメカニズムを持っているかは今の段階では明確にすることはできない。また, 日本語の古語, 琉球諸語, シンハラ語と同じく係り結びの体系を有する言語としてユカギール語やミングレル語があるが, これらの言語においても本稿で提案するメカニズムが適用できるか検討する必要があるが, これに関しても今後の課題としておく。

参考文献

- Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou (1998) “Parametrizing AGR: Word Order, Verb-movement and EPP-checking,” *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.
- Alexiadou, Artemis, Liliane Haegeman, and Melita Stavrou (2007) *Noun Phrase in the Generative Perspective*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Allen, Cynthia (1977) *Topics in Diachronic English Syntax*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Andrew, S. O. (1940) *Syntax and Style in Old English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Authier, J. -Marc (1992) “Iterated CPs and Embedded Topicalization,” *Linguistic Inquiry* 23, 329-336.
- Baker, Carol Leroy (1970) “Notes on the Description of English Questions: the Role of an Abstract Question Morpheme,” *Foundation of Language* 6, 197-219.
- Bayer, Josef (1984) “COMP in Bavarian Syntax,” *The Linguistic Review* 3, 209-274.
- Bayer, Josef (1996) *Directionality and Logical Form*, Kluwer, Dordrecht.
- Bayer, Josef (2004) “Decomposing the Left Periphery, Dialectal and Cross-linguistic Evidence,” *The Syntax and Semantics of the Left Periphery*, ed. by Horst Lohnstein and Susanne Trissler, 59-95, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Benincà, Paola and Cecilia Poletto (2004) “A Case of *do*-support in Romance,” *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 51-94.
- Bergh, Gunnar and Aimo Seppänen (1992) “Subject Extraction in English: the Use of the *That*-complementizer,” *English Historical Linguistics*, ed., by Francisco Fernández, Miguel Fuster, and Juan José Calvo, 131-143, Benjamins, Philadelphia.
- den Besten, Hans (1983) “On the Interaction of Root Transformation and Lexical Deletive Rules,” *On the Formal Syntax of the Westgermania*, ed., by Werner Abraham, 47-131, John Benjamins, Amsterdam.
- Bhatt, Rajesh (2005) “Long Distance Agreement in Hindi-Urdu,” *Natural Language and Linguistic Theory* 23, 757-807.
- Bhatt, Rakesh and James Yoon (1991) “On the Composition of Comp and Parameters of V2,” *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 10, 41-52.
- Bhatt, Rajesh and Roumyana Pancheva (2006) “Conditionals,” *The Blackwell Companion to Syntax Vol. 1*, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 638-687, Blackwell, Oxford.
- Bianchi, Valentina (1999) *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Biberauer, Theresa and Ian Roberts (2010) “Subjects, Tense and Verb-movement,” *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, ed. by Theresa Biberauer, Anders Holmberg, Ian Roberts, Michelle Sheehan, 263-302, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bobaljik, Jonathan D. and Susi Wurmbrand (2003) “Long Distance Object Agreement, Restructuring and Anti-

- Reconstruction,” *Proceedings of the North East Linguistic Society* 33, 67-86.
- Bolinger, Dwight (1972) *That's That*, Mouton, The Hague.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London and New York.
- Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko and Howard Lasnik (2003) “On the Distribution of Null Complementizers,” *Linguistic Inquiry* 34, 527-546.
- Brandner, Ellen (2004) “Head-movement in Minimalism, and V2 as FORCE-marking,” *The Syntax and Semantics of the Left Periphery*, ed. by Horst Lohnstein and Susanne Trissler, 97-138, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Branigan, Philip (1992) *Subjects and Complementizers*, Doctoral dissertation, MIT.
- Bresnan, Joan (1972) *Theory of Complementation in English Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Browning, Marguerite (1996) “CP Recursion and *That-t* Effect,” *Linguistic Inquiry* 27, 237-256.
- Cable, Seth (2010) *The Grammar of Q: Q-Particles, Wh-Movement, and Pied-Piping*, Oxford University Press, New York.
- Carstens, Vicki (2003) “Rethinking Complementizer Agreement: Agree with a Case-checked Goal,” *Linguistic Inquiry* 34, 393-412.
- Cheng, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of WH-Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Cheng, Lisa Lai-Shen (2000) “Moving Just the Feature,” *Wh-scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller, and Arnim von Stechow, 77-99, John Benjamins, Amsterdam.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1991) “Some Notes on Economy of Derivation and Representation,” *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory,” *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001a) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001b) “Beyond Explanatory Adequacy,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20.
- Chomsky, Noam (2007) “Approaching UG from Below,” *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies, and Beyond*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Chomsky, Noam (2016) “Puzzles about Phases,” To appear in *Linguistic Variation: Structure and Interpretation. A Festschrift in Honour of M. Rita Manzini*, ed. by L. Franco and P. Lorusso, De Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2017) “The Language Capacity: Architecture and Evolution,” *Psychonomic Bulletin & Review* 24, 200-203.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) “Filters and Control,” *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
- Chomsky, Noam, Angel J. Gallego, and Dennis Ott (2019) “Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges,” unpublished manuscript, linguibuzz/003507 (3rd version).
- Chung, Sandra and James McCloskey (1987) “Government, Barriers, and Small Clauses in Modern Irish,” *Linguistic Inquiry* 18, 173-237.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads*, Oxford University Press, Oxford.
- Culicover, Peter (1991) “Topicalization, Inversion, and Complementizers in English,” ms., The Ohio State University.
- Culicover, Peter (1991) “Polarity, Inversion, and Focus in English,” *Proceedings of the Eastern States Conference on Linguistics '91*, 46-68.
- Culicover, Peter (1993) “Evidence Against ECP Accounts of the *That-t* effect,” *Linguistic Inquiry* 24, 557-567.
- de Cuba, Carlos Francisco (2007) *On (Non)factivity, Clausal Complementation and the CP-field*, Doctoral dissertation, Stony Brook University.
- deHann, Germen and Fred Weerman (1986) “Finiteness and

- Verb Fronting in Frisian,” *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*, ed. by Hubert Haider and Martin Prinzhorn, 77-110, Foris, Dordrecht.
- Déprez, Viviane and Amy Pierce (1993) “Negation and Functional Projections in Early Grammar,” *Linguistic Inquiry* 24, 25-68.
- Diesing, Molly (1990) “Verb Movement and the Subject Position in Yiddish,” *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 41-79.
- Doherty, Cathal (1997) “Clauses without Complementizers: Finite IP-complementation in English,” *The Linguistic Review* 14, 179-220.
- Doherty, Cathal (2000) *Clauses without “That”: The Case for Bare Sentential Complementation in English*, Garland, New York and London.
- Dukes, Michael (1993) “On the Status of Chamorro Wh-agreement,” *The Proceedings of the 11th West Coast Conference of Formal Linguistics*, 177-190.
- Ellegård, Alvar (1953) *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of its Use in English*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.
- Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press, New York.
- Epstein, Samuel David and Daniel T. Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Eythórsson, T. (1996) “Functional Categories, Cliticization, and Verb Movement in the Early Germanic Languages,” *Studies in Comparative Germanic Syntax Vol. II*, ed. by H. Thráinsson et al., 109-139, Kluwer.
- Fiengo, Robert and James Higginbotham (1981) “Opacity in NP,” *Linguistic Analysis* 7, 395-421.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Geis, Michael (1975) “English Time and Place Adverbials,” *Working Papers in Linguistics* 18, Ohio State University, 1-11.
- Gelderen, Elly van (2011) *The Linguistic Cycle: Language Change and the Language Faculty*, Oxford University Press, New York.
- Grimshaw, Jane (1979) “Complement Selection and the Lexicon,” *Linguistic Inquiry* 10, 279-326.
- Grimshaw, Jane (1993) “Minimal Projection, Heads, and Optimality,” ms., Rutgers University.
- Grimshaw, Jane (1997) “Projection, Heads, and Optimality,” *Linguistic Inquiry* 28, 373-422.
- Grimshaw, Jane and Vieri Samek-Lodovici (1995) “Optimal Subjects,” *Papers in Optimality Theory*, University of Massachusetts Occasional Papers 18, ed. by Jill N. Beckman, Laura Walsh Dickey and Suzanne Urbanczyk, 589-605.
- Haeblerli, Eric (2003) “Categorial Features as the Source of EPP and Abstract Case Phenomena,” *New Perspectives on Case Theory*, ed. by Ellen Brandner and Heike Zinsmeister, 89-126, CSLI, Stanford.
- Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*, Basil Blackwell, Oxford.
- Haegeman, Liliane (1992) *Theory and Description in Generative Syntax: A Case Study in West Flemish*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Haegeman, Liliane (2004) “DP Periphery and Clausal Periphery: Possessor Doubling in West Flemish,” *Peripheries*, ed. by David Adger, Cécile de Cat, and George Tsoulas, 211-240, Kluwer, Dordrecht.
- Haegeman, Liliane (2010) “The Internal Syntax of Adverbial Clauses,” *Lingua* 123, 628-648.
- Haegeman, Liliane (2011) “The Movement Derivation of Conditional Clauses,” *Linguistic Inquiry* 41, 595-621.
- Haegeman, Liliane (2014) “Locality and the Distribution of Main Clause Phenomena,” *Locality*, ed. by Enoch Oladé Aboh, Maria Teresa Guasti, and Ian Roberts, 186-222, Oxford University Press, New York.
- Hagstrom, Paul (1998) *Decomposing Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Haider, Hubert (2010) *The Syntax of German*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Haider, Hubert and Martin Prinzhorn, eds. (1985) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*, Foris, Dordrecht.
- Haider, Hubert, Susan Olsen, and Sten Vikner, eds. (1995) *Studies in Comparative German Syntax*, Kluwer, Dordrecht.
- Haider, Hubert (2010) *The Syntax of German*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Haik, Isabelle (1990) “Anaphoric, Pronominal and Referential INFL,” *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 347-374.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection,” *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111-176, MIT Press, Cambridge, MA.
- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1998) “Licensing in the Non-lexicalist Lexicon: Nominalizations, Vocabulary Items and the Encyclopaedia,” *MIT Working Papers in Linguistics* 32, 119-137.
- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1999) “Distributed Morphology,” *Glott International* 4.4, 3-9.
- Hegarty, Michael (1992) *Adjunct Extraction and the Chain Configurations*, Doctoral dissertation, MIT.

- Heim, Irene (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Hellan, Lars and Kirsti Koch Christensen, eds. (1986) *Topics in Scandinavian Syntax*, Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Hendriks, Peter (1998) “Kakari Particles and the Merger of the Predicative and Attributive Forms in the Japanese Verbal System,” *Japanese/Korean Linguistics 7*, ed. by Noriko Akatsuka, Hajime Hoji, Shoichi Iwasaki, and Susan Strauss, 197-210, CSLI, Stanford.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford.
- Hinterhölzl, Roland and Svetlana Petrova (2010) “From V1 to V2 in West Germanic,” *Lingua* 120, 315-328.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2012) “Syntactic Metamorphosis: Clefts, Sluicing, and In-Situ Focus in Japanese,” *Syntax* 15, 142-180.
- Hoekstra, Eric (1993) “Dialectal Variation inside CP as Parametric Variation,” *Dialectsyntax*, ed. by Werner Abraham and Joseph Bayer, 161-179, Westdeutscher Verlag, Opladen.
- Holmberg, Anders (1986) *Word Order and Syntactic Features in the Scandinavian Languages and English*, University of Stockholm, Stockholm.
- Holmberg, Anders (2000) “Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive,” *Linguistic Inquiry* 31, 445-483.
- Holmberg, Anders and Christer Platzack (1991) “On the Role of Inflection in Scandinavian Syntax,” *Issues in Germanic Syntax*, ed. by Werner Abraham and Wim Kosmeijer, and Eric Reuland, 93-118, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Holmberg, Anders and Christer Platzack (1995) *The Role of Inflection in Scandinavian Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Hooper, Joan and Sandra Thompson (1973) “On the Applicability of Root Transformations,” *Linguistic Inquiry* 4, 465-497.
- Hopper, Paul and Elizabeth C. Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Iatridou, Sabine and Anthony Kroch (1992) “The Licensing CP-recursion and its Relevance to the Germanic Verb-Second Phenomenon,” *Working Papers in Scandinavian Syntax* 50, 1-24.
- 衣畑智秀 (2016) 「南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び」, 『言語研究』 149, 19-42.
- Inada Toshiaki (1997) “Interrogative Inversion in Embedded Clauses and Varieties of English,” paper presented at the Fukuoka Linguistic Circles.
- Inada, Toshiaki and Noriko Terazu Imanishi (1997) “Complement Selection and Inversion in Embedded Clauses,” *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shinji Chiba, 345-377, The Taishukan Publishing Company, Tokyo.
- Isac, Daniela and Edit Jakab (2004) “Mood and Force Features in the Languages of the Balkans,” *Balkan Syntax and Semantics*, ed. by Olga Mišeska Tomić, 315-337, John Benjamins, Amsterdam.
- Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jonas, Dianne (2002) “Residual V-to-I,” *Syntactic Effects of Morphological Change*, ed. by David W. Lightfoot, 251-270, Oxford University Press, Oxford.
- Kandybowicz, Jason (2006) “Comp-trace Effects Explained Away,” *Proceedings of the 25th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 220-228.
- Kayne, Richard (1981a) “ECP Extensions,” *Linguistic Inquiry* 12, 93-133.
- Kayne, Richard (1981b) “On Certain Difference between French and English,” *Linguistic Inquiry* 12, 349-371.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kemenade, Ans van (1997) “V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English,” *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 326-352, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kemenade, Ans van (1999) “Sentential Negation and Clause Structure in Old English,” *Negation in the History of English*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, Gunnel Tottie and Wim van der Wurff, 147-165, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) “Fact,” *Progress in Linguistics*, ed. by Manfred Bierwisch and K. E. Heidolph, 141-173, Mouton, The Hague.
- 北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』, 大修館書店, 東京.
- 北原保雄 (1984) 『文法的に考える—日本語の表現と文法—』, 大修館書店, 東京.
- Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Klima, Edward S. (1964) “Negation in English,” *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Koizumi, Masatosi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (2008) “The que / qui Alternation: New Analytical Directions,” draft, University of California Los Angeles.
- Kosmeijer, Wim (1986) “The Status of the Finite Inflection in

- Icelandic and Swedish,” *Working Papers in Scandinavian Syntax* 26, Linguistics Department, University of Trondheim, Trondheim.
- Krapova, Iliana (2010) “Bulgarian Relative and Factive Clauses with the Invariant Complementizer *deto* ‘that’,” *Lingua* 120, 1240-1272.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (1997) “Verb Movement in Old and Middle English: Dialect Variation and Language Contact,” *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 297-325, Cambridge University Press, Cambridge.
- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論』, 開拓社, 東京.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) “Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese,” *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- 葉原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」, 『統語論の新展開と日本語研究』, 長谷川信子 (編), 95-127, 開拓社, 東京.
- Kuwabara, Kazuki (2013) “Peripheral Effects in Japanese Questions and the Fine Structure of CP,” *Lingua* 126, 92-119.
- Laenzlinger, Christopher (2005) “French Adjective Ordering: Perspectives on DP-internal Movement Types,” *Lingua* 115, 645-689.
- Laka, Itziar (1990) *Negation in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Landau, Idan (2007) “EPP Extensions,” *Linguistic Inquiry* 38, 485-523.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1984) “On the Nature of Proper Government,” *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move a*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lightfoot, David (1989) “The Child’s Trigger Experience: Degree-0 Learnability,” *Behavioral and Brain Sciences* 12, 321-334.
- Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Mahajan, Anoop (2000) “Towards a Unified Treatment of Wh-expletives in Hindi and German,” *Wh-scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller, and Arnim von Stechow, 317-332, John Benjamins, Amsterdam.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版, 東京.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』, くろしお出版, 東京.
- McCloskey, James (1992) “Adjunction, Selection and Embedded Verb Second,” *Linguistic Research Report LRC-92-07*, University of California, Santa Cruz.
- McCloskey, James (1996) “On the Scope of Verb-Movement in Irish,” *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 47-104.
- Melvold, Janis (1991) “Factivity and Definiteness,” *MIT Working Papers in Linguistics 15: More Papers on Wh-Movement*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Hamida Demirdash, 97-117, MIT.
- Miller, Philip (2001) “Discourse Constraints on (non) extraposition from Subject in English,” *Linguistics* 39, 683-701.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店, 東京.
- Munemasa, Yoshihiro (1993) “Abstract Movement of Functional Category and That-Trace Effect,” *Kyudai Eibungaku* 36, 155-186, Kyushu University Graduate School.
- Munemasa, Yoshihiro (1994) “Subject-Auxiliary Inversion,” *Kyudai Eibungaku* 37, 249-280, Kyushu University Graduate School.
- Munemasa, Yoshihiro (1995) “Feature Checking and That-Trace Effect,” *Proceedings of the Kansai Linguistic Society* 15, 69-78, Kansai Linguistic Society.
- Munemasa, Yoshihiro (1998) “A Note on Tense Islands,” *English Linguistics* 15, 301-308, Kaitakusha, Tokyo.
- Munemasa, Yoshihiro (2001a) “An Optimality Theoretic Approach to Subject-AUX Inversion and its Cross-linguistic Variation,” *Bulletin of the Institute of Foreign Language Education Kurume University* 8, 117-152, Kurume University.
- Munemasa, Yoshihiro (2001b) “Inversion in Interim Grammars,” *Research Bulletin of Fukuoka Institute of Technology*, Vol.34, 69-87, Fukuoka Institute of Technology.
- Munemasa, Yoshihiro (2003) *An Optimality Theoretic Approach to the C-system and its Cross-linguistic Variation*, Kyushu University Press, Fukuoka.
- Munemasa, Yoshihiro (2004a) “Variation of Inversion in Embedded Questions” *Papers from the 21st National Conference of the English Linguistic Society of Japan (JELS 21)*, 161-170, the English Linguistic Society of Japan.
- Munemasa, Yoshihiro (2004b) “On Covert Wh-agreement and That-trace Effect,” *Research Bulletin of Fukuoka Institute of Technology*, Vol. 37, 27-34, Fukuoka Institute of Technology.
- Munemasa, Yoshihiro (2006) “Notes on Covert Wh-agreement,” *English Linguistics* 23, 454-464, Kaitakusha, Tokyo.
- Munemasa, Yoshihiro (2007) “Variation of Interrogatives in English and French,” *Research Bulletin of Fukuoka Institute of Technology*, Vol. 40, 65-71, Fukuoka Institute of Technology.
- Munemasa, Yoshihiro (2008) “On the Features of the Extended Projection Principle,” *Research Bulletin of Fukuoka Institute of Technology*, Vol. 41, 55-64, Fukuoka Institute of Technology.
- Munemasa, Yoshihiro (2013) “Review Article of *Optimality*

- Theory and Language Change: The Activation of Potential Constraint Interactions,* *English Linguistics* 29, 505-515, Kaitakusha, Tokyo.
- 宗正佳啓 (1999) 「不定詞節内の統語現象とその言語差異」, *Papers from the Sixteenth National Conference of The English Linguistic Society of Japan (JELS16)*, 161-170, The English Linguistic Society of Japan.
- 宗正佳啓 (2003) 「標準英語の非顕在的 wh 素性照合」, 『言語学からの眺望2003』, 127-141, 九州大学出版会, 福岡.
- 宗正佳啓 (2005) 「疑問文の習得と制約階層差」, 『福岡工業大学研究論集』, 38巻1号, 49-54, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2007a) 「ゼロ that 節の起源」, *Papers from the 24th National Conference of the English Linguistic Society of Japan (JELS 24)*, 151-160, the English Linguistic Society of Japan.
- 宗正佳啓 (2007b) 「補文標識の移動とその言語差異」, 『九州大学言語学論集第28号』, 69-91, 九州大学.
- 宗正佳啓 (2007c) 「補文標識の移動とその通時的言語差異」, 『福岡工業大学研究論集』, 40巻, 55-64, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2007d) 「補文化に関する言語多様性」, 『英語青年』2007年12月号, 研究社.
- 宗正佳啓 (2008a) 「最適性理論に基づいた言語文法モデル構築のための研究」, 平成17年～平成19年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書.
- 宗正佳啓 (2008b) 「EPP 素性と wh 移動」, 『九州大学言語学論集第29号』, 69-91, 九州大学.
- 宗正佳啓 (2009) 「多重 wh 疑問文とその言語差異」, 『福岡工業大学研究論集』, 42巻, 37-51, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2010a) 「名詞句内の wh 移動と優位性効果」, 『福岡工業大学研究論集』, 42巻, 147-152, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2010b) 「名詞句からの Wh 移動」, 『福岡工業大学研究論集』, 43巻, 21-26, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2011) 「EPP 素性と Wh 作用域」, 『福岡工業大学研究論集』, 44巻, 23-34, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2012) 「Wh 素性の浸透と wh 作用域」, 『ことばとところの探求』, 195-207, 開拓社, 東京.
- 宗正佳啓 (2013a) 「名詞句内の空演算子について」, 『言語学からの眺望 2013』, 244-258, 九州大学出版会, 福岡.
- 宗正佳啓 (2013b) 「EPP 素性と主要部移動の関連」, 『福岡工業大学研究論集』, 46巻, 69-82, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2015) 「指定部の演算子について」, 『福岡工業大学研究論集』, 48巻, 63-71, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2018) 「発話フォースと主要部移動」, 『福岡工業大学研究論集』, 51巻, 1-14, 福岡工業大学.
- 宗正佳啓 (2019) 「That-痕跡効果再考」, 『福岡工業大学研究論集』, 51巻, 113-128, 福岡工業大学.
- Müller, Gereon (1995) *A-bar Syntax*, Gruyter, Berlin.
- 野村剛史 (2005) 「中古係り結びの変容」, 『国語と国文学』82(11), 36-46.
- Noonan, Michael (1985) “Complementation,” *Language Typology and Syntactic Description Vol 2*, ed. by Timothy Shopen, 42-140, Cambridge University Press, Cambridge.
- 仁田義雄 (1985) 「文の骨組み - 文末の文法カテゴリーをめぐって -」, 『応用言語学講座 1 巻: 日本語の教育』, 明治書院, 東京.
- Ogawa, Yoshiki (2001) *A Unified Theory of Verbal and Nominal Projections*, Oxford University Press, Oxford.
- Ono, Hajime (2006) *An Investigation of Exclamatives in English and Japanese: Syntax and Sentence Processing*, Doctoral dissertation, University of Maryland, College Park.
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』, 研究社, 東京.
- 奥津敬一郎 (1976) 「生成文法と国語学」, 『岩波講座日本語 6 巻: 文法 I』, 岩波書店, 東京.
- Pak, Miok (n.d.) “Korean Particles and Clause Types,” ms., Georgetown University, <https://ja.scribd.com/document/39445214/Korean-ParticlesMiokPak>.
- Paoli, Sandra (2007) “The Structure of the Left Periphery: COMPs and Subjects Evidence from Romance,” *Lingua* 117, 1057-1079.
- Pesetsky, David (1982) “Complementizer-trace Phenomena and the Nominative Island Condition,” *The Linguistic Review* 1, 297-343.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) “T-to-C Movement: Causes and Consequences,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 355-426, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2004) “Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories,” *The Syntax of Time*, ed. by Jacqueline Guéron and Jacqueline Lecarme, 495-537, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pierce, Amy (1989) *On the Emergence of Syntax: A Crosslinguistic Study*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pierce, Amy (1992) *Language Acquisition and Syntactic Theory: A Comparative Analysis of French and English Child Grammars*, Kluwer, Dordrecht.
- Pintzuk, Susan (1999) *Phrase Structures in Competition*, Garland, New York.
- Platzack, Christer (1986) “COMP, INFL, and Germanic Word Order,” *Topics in Scandinavian Syntax*, ed. by Lars Hellan and Kirsti Koch Christensen, 185-234, Reidel, Dordrecht.
- Platzack, Christer (1988) “The Emergence of a Word Order Difference in Scandinavian Subordinate Clauses,” *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*, 215-238.

- Platzack, Christer and Anders Holmberg (1989) "The Role of AGR and Finiteness," *Working Papers in Scandinavian Syntax* 43, 51-76.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*, RuCCS Technical Report 2, Rutgers University Center.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: the Early Nature of Early Child Grammars of English*, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (1995) "Phrase Structure and Functional Categories," *The Handbook of Child Language*, ed. by Paul Fletcher and Brian MacWhinney, 483-507, Blackwell Publishers, Oxford.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Reintges, Chris H., Philip LeSourd, and Sandra Chung (2006) "Movement, *Wh*-agreement, and Apparent *Wh*-in-situ," *WH-movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 165-194, MIT Press, Cambridge, MA.
- Reuland, Eric (1990) "Head Movement and the Relation between Morphology and Syntax," *Yearbook of Morphology* 3, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 129-161, Foris, Dordrecht.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Riemsdijk, Henk van (1982) "Correspondence Effects and the Empty Category Principle," *Tilburg Papers in Language and Literature* 12, University of Tilburg, Tilburg.
- Rivero, Maria-Luisa (1994) "On the Indirect Questions, Commands, and Spanish Quotative *Que*," *Linguistic Inquiry* 25, 547-554.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the *Wh*-criterion," *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 63-90, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by Lilian Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (2004) "Locality and Left Periphery," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures Vol.3*, ed. by Adriana Belletti, 223-251, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects," *WH-movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 97-133, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (2010) "On Some Properties of Criterial Freezing Effects," *The Complementizer Phase: Subjects and Operators*, ed. by E. Phoevos Panagiotidis, 17-32, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (2013) "Focus, Topic and the Cartography of the Left Periphery," *The Bloomsbury Companion to Syntax*, ed. by Cristina Parodi and Silvia Luraghi, 436-451, Bloomsbury, London.
- Rizzi, Luigi (2014) "Some Consequences of Criterial Freezing: Asymmetries, anti-adjacency and Extraction from Cleft Sentences," *Functional Structure from Top to Toe: The Cartography of Syntactic Structures Vol. 9*, ed. by Peter Svenonius, 19-45, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (2015) "Cartography, Criteria, and Labeling," *Beyond Functional Sequence*, ed. by Uri Shlonsky, 314-338, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi and Ian Roberts (1996) "Complex Inversion in French," *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 91-116, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi and Uri Shlonsky (2007) "Strategies of Subject Extraction," *Interfaces + Recursion = Language? Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Hans Martin Gärtner and Uli Sauerland, 115-160, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian (2005) *Principles and Parameters in a VSO Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2002) "The Extended Projection Principle as a Condition on the Tense Dependency," *Subjects, Expletives, and the EPP*, ed. by Peter Svenonius, 125-155, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rochmont, Michael (1989) "Topic Islands and the Subjacency Parameter," *Canadian Journal of Linguistics/Revue Canadienne de Linguistique* 34, 145-170.
- Roeper, Thomas (1990) "How a Marked Parameter is Chosen: Adverbs and *Do*-insertion in the IP of Child Grammar," *Papers in the Acquisition of WH*, University of Massachusetts Occasional Papers Special Edition, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 175-202.

- Roussou, Anna (1993) “Nominalized Clauses in the Syntax of Modern Greek,” *UCL Working Papers in Linguistics* 3, 77-100.
- Roussou, Anna (1994) *The Syntax of Complementizers*, Doctoral dissertation, University College London.
- Roussou, Anna (2002) “C, T, and the Subject: *that-t* Phenomena Revisited,” *Lingua* 112, 13-52.
- Roussou, Anna (2010) “Selecting Complementizers,” *Lingua* 120, 582-603.
- Rudin, Catherine (1988) “On Multiple Questions and Multiple WH fronting,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Sabel, Joachim (2000) “Partial Wh-movement and the Typology of Wh-questions,” *Wh-scope Marking*, ed. by Uli Lutz, Gereon Müller, and Arnim von Stechow, 409-446, John Benjamins, Amsterdam.
- Samuels, Michael L. (1972) *Linguistic Evolution with Special Reference to English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Santorini, Beatrice (1989) *The Generalization of the Verb-Second Constraint in the History of Yiddish*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Saito, Mamoru, and Tomoko Haraguchi (2012) “Deriving the Cartography of the Japanese Right Periphery: The Case of Sentence-Final Discourse Particles,” *Iberia* 4, 104-123.
- Sato, Yosuke and Yoshihito Dobashi (2016) “Prosodic Phrasing and the That-trace Effect,” *Linguistic Inquiry* 47, 333-349.
- Samuels, Michael L. (1972) *Linguistic Evolution with Special Reference to English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Santorini, Beatrice (1989) *The Generalization of the Verb-Second Constraint in the History of Yiddish*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- 澤田治美 (1983) 「S」システムと日本語助動詞の相互連結順序, 『日本語学』, 2 卷12号.
- Sells, Peter, John Rickford, and Thomas Wasow (1996) “Optimal Theoretic Approach to Variation in Negative Inversion in AAVE,” *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 591-627.
- Shlonsky, Ur (1988) “Complementizer-cliticization in Hebrew and the Empty Category Principle,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 191-205.
- Sigurðsson, Halldór Ármann (1990) “V1 Declaratives and Verb Raising in Icelandic,” *Modern Icelandic Syntax*, ed. by Joan Maling and Annie Zaenen, 41-69, Academic Press, San Diego.
- Sobin, Nicholas (1987) “The Variable Status of COMP-Trace Phenomena,” *Natural Language and Linguistic Theory* 5, 33-60.
- Sobin, Nicholas (2002) “The *Comp*-trace Effect, the Adverb Effect and Minimal CP,” *Journal of Linguistics* 38, 527-560.
- Sobin, Nicholas (2009) “Prestige Case Forms and the *Comp*-trace Effect,” *Syntax* 12, 32-59.
- Staraki, Eleni (2017) *Modality in Modern Greek*, Cambridge Scholars Publishing, Landy Stephenson Library, Newcastle upon Tyne.
- Stowell, Timothy (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Stowell, Timothy (1982) “The Tense of Infinitives,” *Linguistic Inquiry* 13, 561-570.
- Stroik, Thomas (1996) *Minimalism, Scope, and VP structure*, Sage Publications, Thousand Oaks.
- Taraldsen, Knut Tarald (2001) “Subject Extraction, the Distribution of Expletives and Stylistic Inversion,” *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, ed. by Aafke Hulk and Jean-Yves Pollock, 163-182, Oxford University Press, Oxford.
- Tesar, Bruce (1998) “Error-Driven Learning in Optimality Theory via the Efficient Computation of Optimal Forms,” *Is the Best Good Enough?: Optimality and Competition in Syntax*, ed. by Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstrom, Martha McGinnis, and David Pesetsky, 421-435, MIT Press, Cambridge, MA.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版, 東京.
- Thráinsson, Höskuldur (2003) “Syntactic Variation, Historical Development, and Minimalism,” *Minimalist Syntax*, ed. by Hendrick Randall, 152-191, Blackwell, Oxford.
- Ura, Hiroyuki (1994) “Varieties of Raising and the Feature-Based Bare Phrase Structure Theory,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 7.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.
- Vikner, Sten (1991) “Relative *der* and Other C⁰ Elements in Danish,” *Lingua* 84, 109-136.
- Vikner, Sten (1994) “Finite Verb Movement in Scandinavian Embedded Clauses,” *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 17-147, Cambridge University Press, Cambridge.
- Vikner, Sten (1995) *Verb movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press, Oxford.
- Vikner, Sten (1997) “V⁰-to-I⁰ Movement and for Person in All Tenses,” *The New Comparative Syntax*, ed. by Lilian Haegeman, 189-213, Longman, London.
- Warner, Anthony (1997) “The Structure of Parametric Change, and V-movement in the History of English,” *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 380-393, Cambridge University Press, Cambridge.

- Watanabe, Akira (1993) “Larsonian CP Recursion, Factive Complements, and Selection,” *Proceedings of North East Linguistic Society* 23, 523-537.
- Weerman, Fred (1988) *The V2 Conspiracy: A Synchronic and a Diachronic Analysis of Verbal Positions in Germanic Languages*, Foris, Dordrecht.
- Weinberg, Amy (1990) “Markedness Versus Maturation: The Case of Subject-Auxiliary Inversion,” *Language Acquisition* 1, 165-194.
- Weissenborn, J (1988) “The Acquisition of Clitic Object Pronouns and Word Order in French: Syntax or Morphology,” ms., Max-Planck-Institute, Nijmegen.
- Weverink, Meike (1991) “Inversion in the Embedded Clause,” *Papers in the Acquisition of WH, University of Massachusetts Occasional Papers*, ed. by Thomas L. Maxfield and Plunkett Bernadette, 19-42.
- Wexler, Ken (1994) “Finiteness and Head Movement in Early Child Grammars,” *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 305-350, Cambridge University Press, Cambridge.
- Zubizarreta, Maria-Luisa (1999) “Word Order in Spanish and the Nature of Nominative Case,” *Beyond Principles and Parameters: Essays in Memory of Osvald Jaeggli*, ed. by Kyle Johnson and Ian Roberts, 223-250, Kluwer, Dordrecht.
- Zubizarreta, Maria-Luisa (2001) “The Constraint on Preverbal Subjects in Romance Interrogatives: a Minimality Effect,” *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, ed. by Aafke Hulk and Jean-Yves Pollock, 183-204, Oxford University Press, Oxford.
- Zwart, C. Jan-Wouter (1997) *Morphosyntax of Verb Movement: A Minimalist Approach to the Syntax of Dutch*, Kluwer, Dordrecht.

コーパス

- Australian Corpus of English (ACE)
 The British National Corpus (BNC)
 The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (LOB)
 The Helsinki Corpus of English Texts (Diachronic Part)
 国立国語研究所 『日本語歴史コーパス』

Old English Text

- King Ælfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, ed. by Henry Sweet, Periodicals Service Company, New York, 1988.
- The Gospel according to Saint Matthew*, ed. by Walter W. Skeat, Cambridge University Press, Cambridge, 1887 [(Reprinted) *The Gospel according to Saint Matthew and Saint Mark*,

Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1970].
Ælfrie's Catholic Homilies: the Second Series, ed. by Malcolm Godden, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1979.

Middle English Text

- Kentish Sermons, Selections from Early Middle English 1130-1250, Part I*, ed. by J. Hall, The Clarendon Press, Oxford, 1963.
- The General Prologue to the Canterbury Tales, The Riverside Chaucer 3rd edition*, ed. by Fred N. Robinson, Houghton Mifflin Company, Boston, 1987.
- The History of Reynard the Fox*, translated from the Dutch original by William Caxton, ed. by N.F. Blake, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1970.
- The Paston Letters*, ed. by James Gairdner, Palgrave Macmillan, Hampshire, 1987.
- The Life and Death of Cardinal Wolsey*, ed. by Richard S. Sylvester, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1959.

Early Modern English Text

- Mr. William Shakespeares Comedies, Histories & Tragedies*, A facsimile edition prepared by Helge Kokeritz with an Introduction by Charles Tyler Prouty, Yale University Press, New Haven, 1954.